

2002年3月

農村地域における 家庭内暴力についての意識および実態

～東北地方を対象として～

委託調査報告書

研究代表

坂本 佳鶴恵

お茶の水女子大学

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金

目次

はじめに

本調査の概要

1. 調査の目的
2. 「ドメスティック・バイオレンス」の操作定義
3. プレ・インタビュー
4. 調査対象者と標本抽出法
5. 調査実施の方法と回収結果

調査結果

1. 回答者の属性
2. 配偶者の属性
3. 家庭生活について
4. 性役割と暴力についての意識
5. 暴力経験

詳細分析 - 暴力と関連する要因

1. 年齢、婚姻年数、世帯構成人数との関係
2. 職業、職業形態、年収との関係
3. 夫婦間の意見調整との関係
4. 決定権との関係
5. 暴力の経験・見聞との関係
6. 生活満足度との関係

まとめ

参考文献

付録資料

1. 調査日程の概要
2. 標本抽出地点と抽出数一覧表
3. 調査票
4. 単純集計表

はじめに

ドメスティック・バイオレンスは、1970年代に欧米で社会問題として議論されるようになり、その法的・社会的対処が検討され施行されるようになってきた。日本でも90年代になってようやく、ドメスティック・バイオレンスは社会問題であるという認識が高まり、昨年「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律（DV防止法）」が成立した。総理府や東京都をはじめ、実態を知るためのいくつかの調査も行われるようになった。しかし、ドメスティック・バイオレンスに対する社会的取り組み、その実態や原因の追及は、まだ端緒についたばかりである。被害者への救済と援助のあり方、加害者の再犯を防ぐための教育や施策など、法的にも制度的にも、検討されねばならない課題が多い。ドメスティック・バイオレンスが起こる社会的・文化的・個別的要因、制度の整備や浸透の方法をさぐるための実態・意識の調査分析も、まだ多く必要である。

そうしたなかで本調査は、これまでほとんど調査がなされてこなかった日本の農村地域にとくに焦点をあて、ドメスティック・バイオレンスに対する認識と実態を調査したものである。これにより、都市部以外の地域に住む女性の、今まであまり知られてこなかった家庭内での状況が浮かび上がってきた。

調査にあたっては、家庭内での暴力の全容を明らかにするため、先行の調査・資料をもとに、ドメスティック・バイオレンスに関する独自の尺度を作った。また、次年度には首都圏の調査も行う予定であり、これらによって、ドメスティック・バイオレンスに対する認識や背景の、農村と都市での違いを掘り下げる予定である。

本調査の概要

1. 調査の目的

本調査は、まだあまり調査されていない日本の農村地域でのドメスティック・バイオレンスに対する認識と実態を明らかにすることを目的とした。次年度に行う予定の首都圏での調査と比較するためのデータの収集でもある。ドメスティック・バイオレンスには、恋人関係や同棲関係における暴力も含まれるが、今回は、婚姻関係にある夫から妻へのドメスティック・バイオレンスに限定して調査した。

また、本調査では、いまだ確立していないドメスティック・バイオレンスの実態や意識の把握をより正確に、学術的に行うことも目的としている。これまで、ほとんどの調査は、典型的な暴力行為について調査しているため、暴力の実態の全容を明らかにす

るという点では不十分であった。本調査は、以下に述べるような方法で、ドメスティック・バイオレンスを規定し、その実態をより正確に把握しようとした。さらには、ドメスティック・バイオレンスに影響を与える要因や関連する要因を明らかにすることもねらいとしている。

2. 「ドメスティック・バイオレンス」の操作的定義

本調査では、ドメスティック・バイオレンスを帰納的に定義した。すなわち、これまでなされてきた主要なインタビュー調査や質問紙調査を検討のうえ、それらにあげられた暴力行為をすべてチェックし、とくに多いものを抽出してドメスティック・バイオレンスの計測項目とした。この作業により、従来調査では看過されていた多様な暴力を、ドメスティック・バイオレンスとして規定し、家庭内での暴力の全容を明らかにすることをねらいとした。

この作業によって、以下の5次元のドメスティック・バイオレンスが抽出された。

殴る、蹴るなどの身体的に加えられる身体的暴力

ののしる、中傷するなどの精神的に苦痛を与えられる精神的暴力

生活費を渡さないなどの経済的暴力

友人とのつきあいを制限するなどの社会的暴力

意思に反し、セックスを強要するなどの性的に苦痛を与えられる性的暴力

上記の5分類に属しないと判断される暴力に関しては、「その他の暴力を受けたり、危険な目にあわされた」や「その他の行動を制限されたり、苦痛な目にあわされた」として、自由回答の欄に記述することとした。分析上、とは項目数も少ないので、併せて経済的・社会的暴力とし、4つの分類に分けて記述する。

3. プレ・インタビュー

本調査の調査票作成にともない、対象となる女性へのプレ・インタビューを行い（2001年6月実施、対象者8名）、設問および選択肢が対象者に有効となるよう検討した。また、調査票作成後予備調査を行い、そこで得られた回答やコメントをもとに、さらに調査票を改良した。

表 1 回答者の属性

回答者	年齢層	婚姻関係	出身地	職業
Aさん	80歳代	未亡人	農村	無職
Bさん	50歳代	有配偶者	農村	専業主婦
Cさん	40歳代	有配偶者	町	自営業
Dさん	30歳代	有配偶者	町	自営業
Eさん	30歳代	有配偶者	漁村	専業主婦
Fさん	30歳代	有配偶者	町	会社員(常勤)
Gさん	20歳代	有配偶者	町	契約社員(常勤)
Hさん	20歳代	有配偶者	町	教員(常勤)

4. 調査対象者と標本抽出法

母集団を東北地方の町村部に住む結婚している女性（以下、有配偶女性）とした。調査対象は、満 20 歳から満 75 歳以下の有配偶女性である。東北 6 県から 4 県を選び、その 4 県下から更に 9 町村を選出した。各 9 町村役場の住民基本台帳より、予備票を含む 2500 サンプルを無作為抽出した（付録資料 2）。

5. 調査実施の方法と回収結果

調査方法：郵送調査法

調査期間：2001 年 8 月 25 日～11 月 30 日

郵送数：2137 名

第 1 次督促通知（2001 年 9 月 20 日郵送）までの回収率：32.6%

第 2 次督促通知（2001 年 10 月 11 日郵送）までの回収率：57.9%

回収率：63.7%（回収数：1361 名）

有効回収率：60.1%（有効標本回収数：1284 名）

調査結果

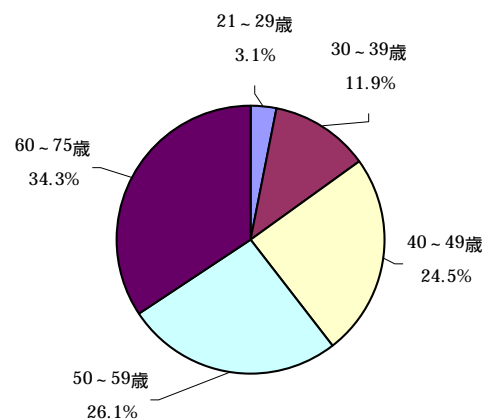
1. 回答者の属性

1.1 有効回答者数【問 2】

有効回答者数は 1,284 人であった。本調査の回答者は、すべて有配偶女性である。そのうち、99.3% (1,275 人) は同居の配偶者がおり、別居の配偶者のいる人は 0.7% (9 人) であった。

1.2 年齢【問 1】

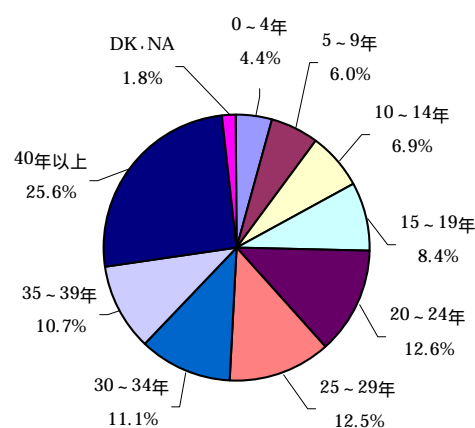
回答者の年齢は、60 歳以上 75 歳以下が 34.3% (441 人) を占め、続いて 50 歳代が 26.1% (335 人)、40 歳代が 24.5% (315 人)、30 歳代が 11.9% (153 人)、20 歳代が 3.1% (40 人) となっている。平均年齢は 53.0 歳であった。



問1 回答者の年齢構成

1.3 婚姻年数【問 4】

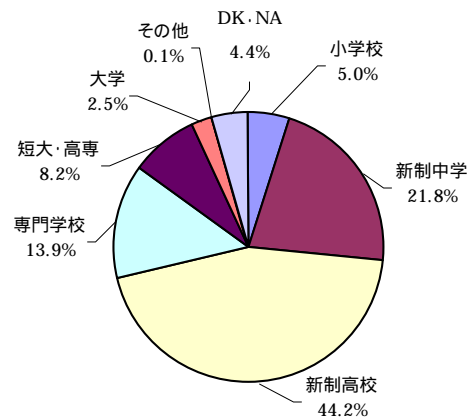
有配偶者の婚姻年数は、婚姻 40 年以上が 25.6% (329 人) がもっとも多く、全体の約 4 分の 1 を占めている。これは、60 歳以上 75 歳以下の回答者が 3 割を上回っているためと思われる。次いで、婚姻 20 年以上 25 年未満が 12.6% (162 人)、婚姻 25 年以上 30 年未満が 12.5% (161 人) とほぼ同じ割合となっており、婚姻 30 年以上 35 年未満が 11.1% (138 人)、婚姻 35 年以上 40 年未満が 10.7% (138 人) と 1 割を超えている。その他、婚姻 15 年以上 20 年未満が 8.4% (108 人)、婚姻 10 年以上 15 年未満が 6.9% (88 人)、婚姻 5 年以上 10 年未満が 6.0% (77 人)、婚姻 5 年未満が 4.4% (56 人) である。平均婚姻年数は 28.7 年であった。



問4 婚姻年数

1.4 最終学歴【問 29】

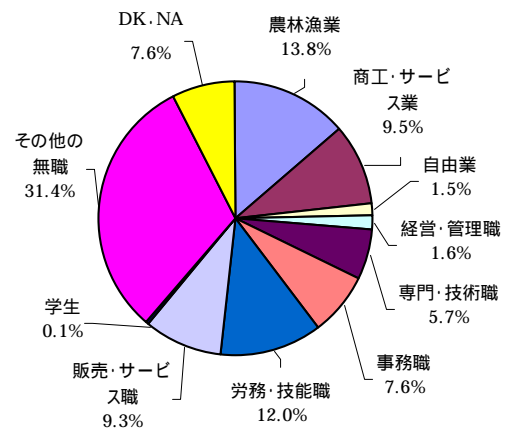
回答者の最終学歴は、新制高校（旧制中学校なども含む）卒業の 44.2%（568 人）がもっとも多く、続いて新制中学（旧制高等小学校なども含む）卒業の 21.8%（280 人）であった。その他順に、専門学校（新制高校卒業後入学したもの）が 13.9%（178 人）、短大・高専（旧制高等学校なども含む）が 8.2%（105 人）、小学校（旧制尋常小学校なども含む）が 5.0%（64 人）、大学（大学院も含む）卒業が 2.5%（32 人）となっている。



問29 回答者の学歴

1.5 職業【問 26、27】

回答者の職業は、無職（専業主婦や年金生活者など）が 31.4%（403 人）ともっとも多く、続いて農林漁業が 13.8%（177 人）、労務・技能職（工場などの生産工程従事者、運転士、電話交換手など）が 12.0%（154 人）と、それぞれ 1 割を超えている。その他多い順にあげると、商工・サービス業（各種の卸・小売店、飲食店、理髪店などのサービス業従事者）が 9.5%（122 人）、販売・サービス職（各種の卸・小売店、飲食店、理髪店などのサービス業従事者）が 9.3%（119 人）、事務職（事務系会社員、事務系公務員など）が 7.6%（97 人）、専門・技術職（教員、研究員、技術者、勤務医など）が 5.7%（73 人）、経営・管理職（会社・団体・官公庁の課長級以上）が 1.6%（21 人）、自由業（開業医、弁護士、著述業など）が 1.5%（19 人）となっている。



問26 回答者の職業

また、回答者の職業を「自営業・家族従業」「勤め人」の別で見ると、「自営業・家族従業」が全体の 24.8%（318 人）、「勤め人」が 36.2%（464 人）と、後者の方が 10 パーセントほど高くなっている。

「勤め人」として働いている回答者の雇用形態であるが、常勤が 63.1%（293 人）、非常勤（パートタイム、アルバイトなど）が 36.6%（170 人）と、6 割以上が常勤で働いている。

1.6 自由に使えるお金【問 28】

次に、回答者が自身の判断で自由に使える金額（月平均）を見ていく。2万円がもっとも多く16.2%（208人）、次いで3万円が15.7%（202人）、5万円が13.2%（170人）、1万円が12.2%（157人）となっている。また、自由に使えるお金がまったくない人も12.1%（155人）と1割を超えている。自由に使える金額が月に2万円以下の人が全体のおよそ4割、5万円以下となると全体のおよそ7割にのぼっている。なお、10万円、15万円、20万円にそれぞれ目立った山が見られるが、これは「自分自身の判断で自由に使えるお金」を「自分が財布を握っている生活費」と解釈して回答した人がいたためだと考えられる。

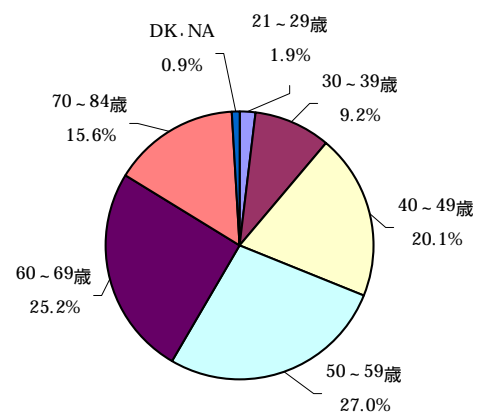
1.7 世帯構成【問 33】

回答者の世帯構成は、回答者を含む世帯構成人数の平均が4.6人である。「配偶者と回答者だけの世帯」（18.1%、232人）がもっとも多いが、同じくらい「4人家族」も多い（18.0%、231人）。次いで、「6人家族」（16.7%、214人）、「5人家族」（15.4%、198人）、「3人家族」（13.8%、177人）、「7人家族」（10.0%、128人）となる。半数の回答者は「2～4人家族」、約4割の回答者は「5～7人家族」の世帯構成を持つ。また、同居している子どもの平均人数は1.3人であるが、これは、回答者が同居する「嫁」を回答者自身の「子ども」とせず、同居する「その他の人」として回答する傾向にあったことと関連していると思われる。

2. 配偶者の属性

2.1 年齢【問 3】

配偶者の年齢は、21歳から84歳まで分布し、50歳代が27.0%（347人）ともっとも多くなっている。続いて60歳代が25.2%（324人）、40歳代が20.1%（258人）、70歳以上84歳以下が15.6%（200人）、30歳代が9.2%（118人）となっている。平均年齢は55.6歳であった。



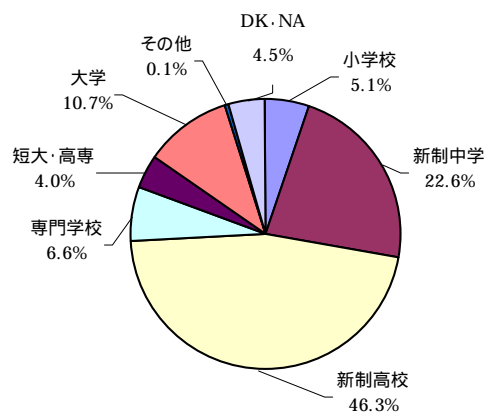
問3 配偶者の年齢構成

2.2 続柄【問 5】

配偶者のうち、長男は60.6%（778人）であり、長男以外は38.5%（494人）であった。

2.3 最終学歴【問 32】

配偶者の最終学歴は、新制高校（旧制中学校なども含む）卒業の 46.3%（595 人）がもっとも多く、続いて新制中学（旧制高等小学校なども含む）卒業の 22.6%（290 人）であった。その他順に、大学（大学院も含む）卒業が 10.7%（137 人）、専門学校（新制高校卒業後入学したもの）が 6.6%（85 人）、小学校（旧制尋常小学校なども含む）が 5.1%（66 人）、短大・高専（旧制高等学校なども含む）が 4.0%（52 人）となっている。



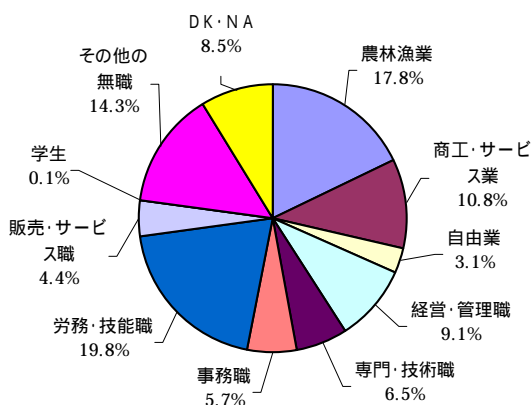
問32 配偶者の学歴

2.4 職業【問 30、31】

配偶者の職業は、労務・技能職（工場などの生産工程従事者、運転士、電話交換手など）が 19.8%（254 人）、続いて農林漁業が 17.8%（228 人）と、それぞれ全体のおよそ 2 割となっている。その他、無職（専業主婦や年金生活者など）が 14.3%（183 人）、商工・サービス業（各種の卸・小売店、飲食店、理髪店などのサービス業従業者）が 10.8%（139 人）と 1 割を超えている。また、経営・専門職（会社・団体・官公庁の課長級以上）が 9.1%（117 人）と 1 割弱となっている。

さらに、配偶者の職業を「自営業・家族従業」「勤め人」の別で見ると、「自営業・家族従業」が全体の 31.7%（407 人）、「勤め人」が 45.5%（584 人）と、後者が 15 パーセントほど多くなっている。

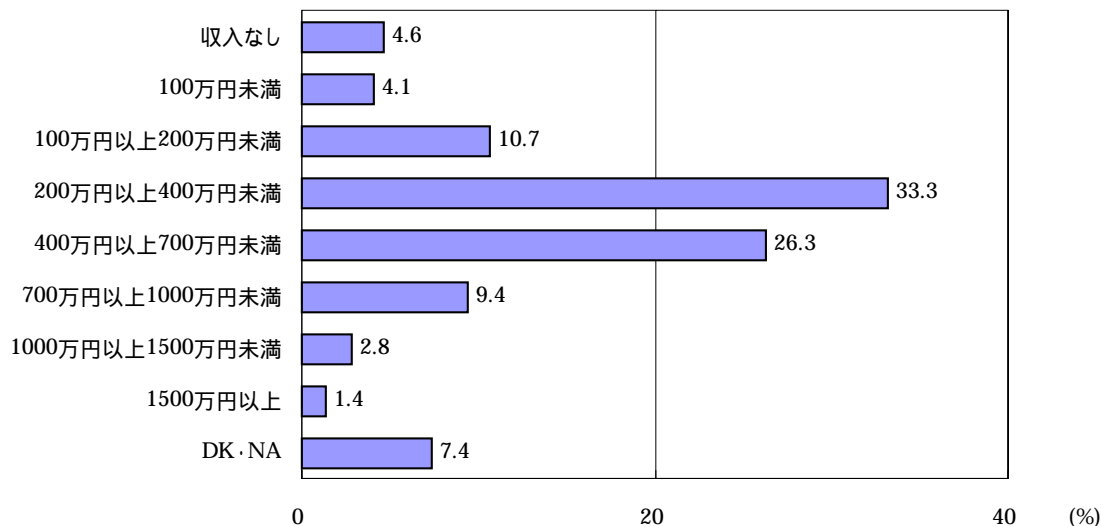
「勤め人」として働いている配偶者の雇用形態であるが、常勤が 92.8%（542 人）、非常勤（パートタイム、アルバイトなど）が 5.0%（29 人）と、常勤で働いている人が 9 割を上回っている。



問30 配偶者の職業

2.5 年収【問 34】

次に、配偶者の年収を見ていく。「200万円以上400万円未満」がもっとも多く33.3%（427人）、次いで「400万円以上700万円未満」が26.3%（338人）とそれぞれ全体の約3割で、他の層に比べて顕著に目立っている。



問34 配偶者の年収

3. 家庭生活について

3.1 家庭内の決定権【問 8】

家庭内での決定権について以下の5項目をあげ、それぞれについて誰が決定するかをたずねた。

3.1.1 子どもに関する問題

著しく多いのが、「配偶者とあなたが話し合って決定する」の70.9%（910人）である。次いで「主としてあなたが決定する」が12.1%（156人）である。これらを合わせると、8割以上（83.0%）の人が子どもに関する問題の決定に関わっていることになる。また、「主として配偶者が決定する」は8.3%（107人）、「あてはまらない」は4.0%（52人）であった。「主として他の人が決定する」と回答した人は1人もいなかった。

3.1.2 配偶者（夫）の小づかい

「配偶者とあなたが話し合って決定する」が34.7%（446人）ともっとも多いが、「主として配偶者が決定する」も33.9%（435人）とほぼ同じ割合になっている。その他、「主としてあなたが決定する」が16.5%（212人）、「あてはまらない」が7.9%（101

人)、「主として他の人が決定する」が0.2%(3人)となっている。

3.1.3 回答者の家庭外活動

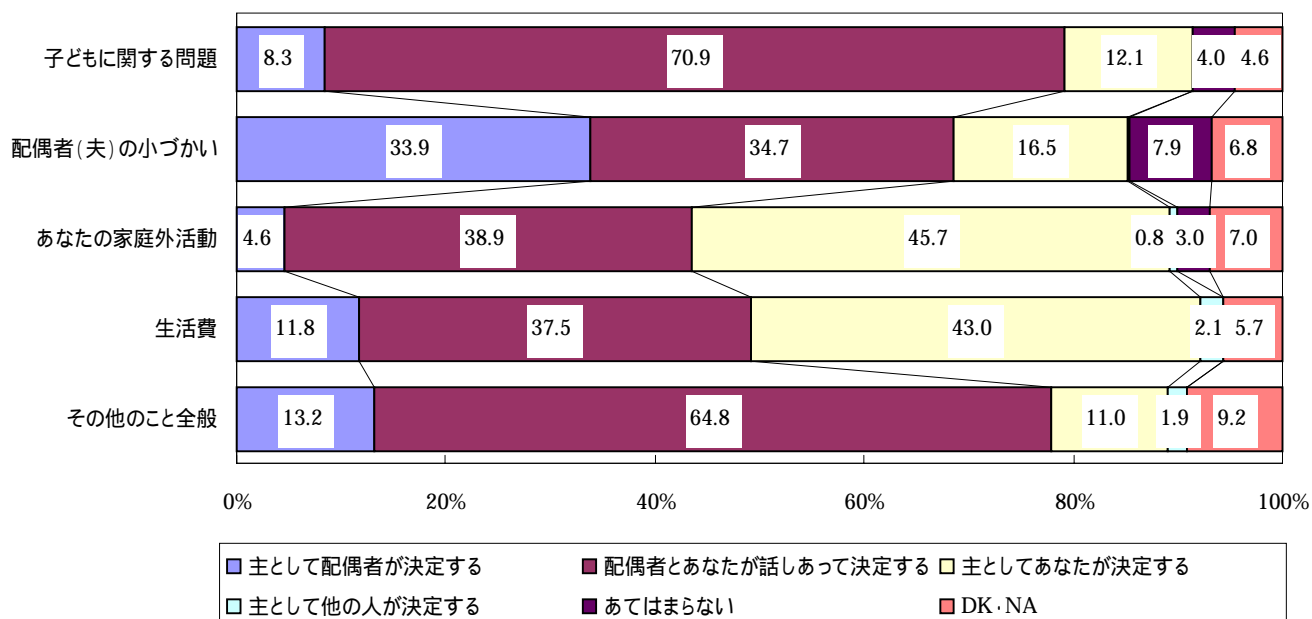
「主としてあなたが決定する」45.7%(587人)がもっとも多く、4割強が家庭外活動について自分で決定していることがわかる。その一方で、「配偶者とあなたが話し合っ

3.1.4 生活費

「主としてあなたが決定する」が43.0%(552人)ともっとも多く、次いで「配偶者とあなたが話し合っ

3.1.5 その他のこと全般

「配偶者とあなたが話し合っ



問8 決定権

3.2 回答者の生活満足度【問 25】

家庭内での人間関係や家庭生活について以下の 4 項目をあげ、それぞれの程度満足しているかを尋ねた。

3.2.1 夫との関係

「どちらかといえば満足している」が 43.0% (552 人) ともっとも多く、「満足している」の 37.1% (477 人) を合わせると、ほぼ 8 割 (80.1%) の人が夫との関係に満足している。その他、「どちらかといえば不満である」が 11.4% (147 人)、「不満である」が 4.6% (59 人) となっている。「無回答・不明」は 3.8% (49 人) である。

3.2.2 子どもとの関係

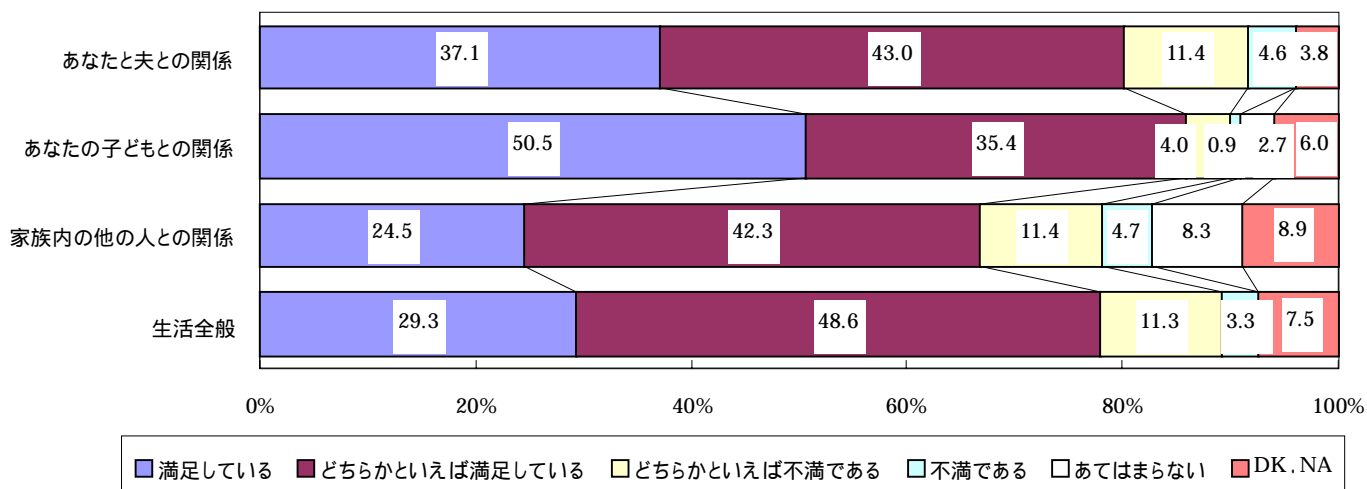
「満足している」が過半数を超え (50.5%、648 人)、「どちらかといえば満足している」の 35.4% を合わせると、8 割強 (85.9%) が子どもとの関係に満足している。これに対し、「どちらかといえば不満である」が 4.0% (52 人)、「不満である」が 0.9% (12 人) と、子どもとの関係に不満を感じている人は 1 割を大きく下回り、他の項目に比べて低くなっている。「あてはまらない」は 2.7% (35 人)、「無回答・不明」は 6.5% (83 人) である。

3.2.3 家庭内の他の人との関係

「どちらかといえば満足している」が 42.3% (543 人) ともっとも多く、「満足している」が 24.5% (314 人) と続いている。これらを合わせると、7 割弱 (66.8%) の人が家庭内の他の人との関係に満足している。その他、「どちらかといえば不満である」が 11.4% (146 人)、「不満である」が 4.7% (60 人) となっている。「あてはまらない」は 8.3% (107 人)、「無回答・不明」は 8.9% (114 人) である。

3.2.4 生活全般

「どちらかといえば満足している」が 48.6% (624 人) ともっとも多く、「満足している」が 29.3% (376 人) と続き、合わせて 8 割弱 (77.9%) が生活全般に満足している。その他、「どちらかといえば不満である」が 11.3% (145 人)、「不満である」が 3.3% (43 人) となっている。「無回答・不明」は 7.5% (96 人) である。



問 25 生活満足度

4. 性役割と暴力についての意識

4.1 性別役割分業についての意識【問 6】

性別役割分業について、以下 4 つの見方をどう思うか尋ねた。

4.1.1 「女は女らしく、男は男らしくする方がよい」という見方について

「どちらかと言えばそう思う」が 42.4% (544 人) と目立って多く、「そう思う」の 33.3% (427 人) を合わせると、7 割以上 (75.7%) の人が「女は女らしく、男は男らしく」という考え方に肯定的である。これに対し、「どちらかと言えばそう思わない」が 10.6% (136 人)、「そう思わない」が 8.1% (104 人) と、いずれも 1 割程度にとどまっている。

4.1.2 「男性は外で働き、女性は家庭を守る方がよい」という見方について

「そう思う」が 18.0% (231 人)、「どちらかと言えばそう思う」が 32.2% (414 人) と、全体の約半数 (50.2%) が「男性は外、女性は家庭」という考え方に賛成している。しかしながら、「そう思わない」とこの考えを積極的に否定している人は 25.9% (333 人) であり、積極的に肯定している人(「そう思う」)を 8 パーセントほど上回っている。

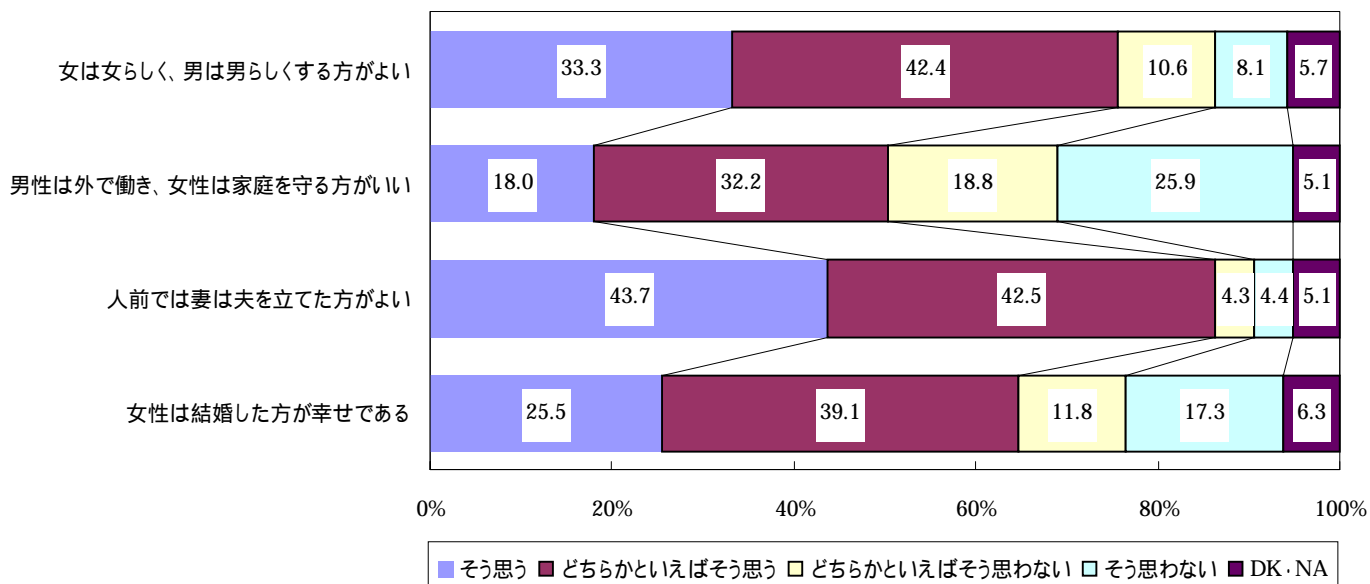
4.1.3 「人前では妻は夫をたてた方がよい」という見方について

「そう思う」が 43.7% (561 人) でもっとも多く、「どちらかと言えばそう思う」が 42.5% (546 人) とほぼ同じ割合が続いている。合わせて 9 割近くの人が「人前では妻

は夫をたてた方がよい」という考え方を肯定しており、4つの見方のうちもっとも高い数字である。一方、「どちらかと言えばそう思わない」が4.3%（55人）、「そう思わない」が4.4%（56人）と、この考え方を否定する人は1割に満たない。

4.1.4 「女性は結婚した方が幸せである」という見方について

「どちらかと言えばそう思う」が39.1%（502人）ともっとも多く、「そう思う」の25.5%（328人）を合わせると、6割以上（64.6%）の人が「女性は結婚した方が幸せである」と考えている。これに対し、「どちらかと言えばそう思わない」が11.8%（151人）、「そう思わない」が17.3%（222人）と、この考えを否定する人は約3割となっている。



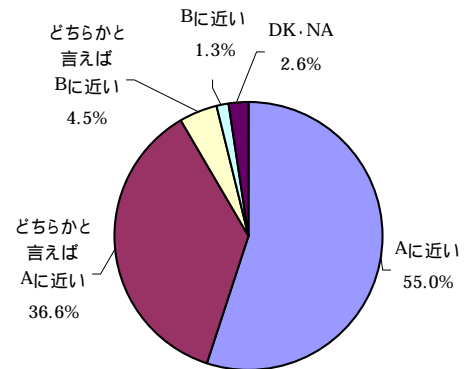
問6 性役割観

4.2 夫婦間で意見がくい違ったときの解決方法についての意識【問7】

夫婦間で意見や考え方がくい違ったときの解決の仕方について、「A：どんなことがあっても、話し合って解決する」「B：場合によっては、力づくで解決することもやむを得ない」のうち、どちらの考え方に賛成するかを尋ねた。それぞれ、回答者の意識と（回答者が考える）配偶者の意識を聞いた。

4.2.1 回答者の意識

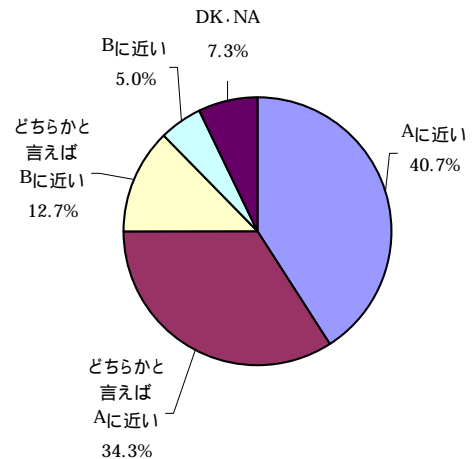
「A：話し合いで解決」が 55.0%（706 人）ともっとも高く、過半数を超えている。「どちらかと言えば話し合いで解決」の 36.6%（470 人）を合わせると、9 割以上の人話し合いによる解決を支持している。これに対し、「どちらかと言えば力づくで解決」が 4.5%（58 人）、「B：力づくで解決」が 1.3%（17 人）と、「場合によっては、力づくで解決するのもやむを得ない」と考える人は 5 パーセント程度にとどまっている。



問7.1 意見違いの解決方法（妻）

4.2.2 （回答者が考える）配偶者の意識

ここでも「A：話し合いで解決」が 40.7%（523 人）ともっとも高くなっているが、回答者自身に比べると、およそ 15 パーセント低い。「どちらかと言えば話し合いで解決」の 34.3%（440 人）を合わせると、7 割半の回答者が自分の夫は話し合いによる解決を支持すると考えている。一方、「どちらかと言えば力づくで解決」が 12.7%（163 人）、「B：力づくで解決」が 5.0%（64 人）と、合わせて 2 割弱の回答者が自分の夫は「場合によっては力づくによる解決」を支持すると考えており、回答者自身の約 3 倍となっている。



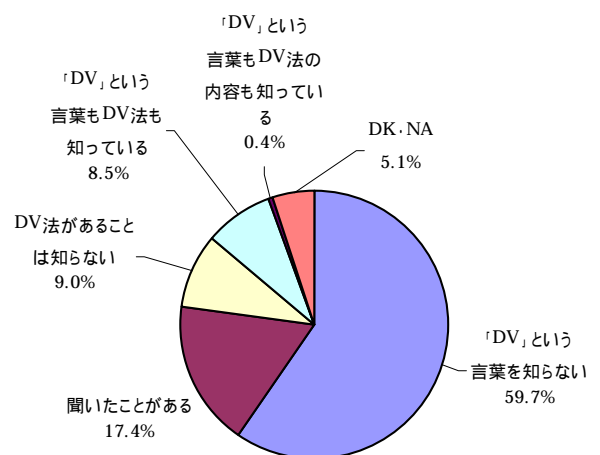
問7.2 意見違いの解決方法（夫）

4.3 夫からの暴力についての意識

4.3.1 「ドメスティック・バイオレンス

（DV）」の認知度について【問 23】

「ドメスティック・バイオレンス（DV）」という言葉を知っているかどうかを尋ねた。圧倒的に多いのは、「知らない」の 59.7%（766 人）である。その他、「言葉だけは聞いたことがある」17.4%（224 人）、「言葉の意味は知っているが、DV 法があることは知らない」9.0%（115 人）、「言葉の意味も、DV 法があることも知っている」8.5%（109



問23 DV認知度

人)と続き、「言葉の意味も、DV法の内容も知っている」になるとわずか0.4%(5人)にとどまっている。

DVという言葉の意味を認知していない人は77.1%と、8割近くに上っている。また、内容を知っているか否かにかかわらず、DV法があることを認知している人は8.9%と、1割を下回っている。

4.3.2 夫からの暴力についての許容度【問9】

夫からの暴力について7項目をあげ、それぞれ許されるかどうかを尋ねた。

「妻が何を言っても無視する」については、28.8%(370人)が「どんなことがあっても許されない」とする一方で、過半数の55.6%(714人)が「場合によっては許される」と回答している。「許される」7.0%(90人)を合わせると、6割以上が許容していることになる。

「妻の交友関係や電話を細かく監視する」については、「どんなことがあっても許されない」が31.4%(403人)と3割以上が否定している。しかし、「許される」も2割弱(19.1%、245人)で、「場合によっては許される」の38.2%(491人)を合わせると、およそ6割が妻の交友関係や電話のチェックを容認している。

「妻の意に反して性的な行為を強要する」については、41.2%(529人)が「どんなことがあっても許されない」としている。「場合によっては許される」が35.9%(461人)、「許される」が9.0%(115人)で、これを合計すると「許されない」とする人を上回っている。

「妻に家計の使いみちを細かく報告させる」については、約半数(51.0%、655人)が「場合によっては許される」と回答している。「許される」の19.1%(245人)を合わせると、およそ7割が家計の細かい報告を許容しており、7項目の中でもっとも多い。これに対し、「どんなことがあっても許されない」は17.4%(223人)にとどまっている。

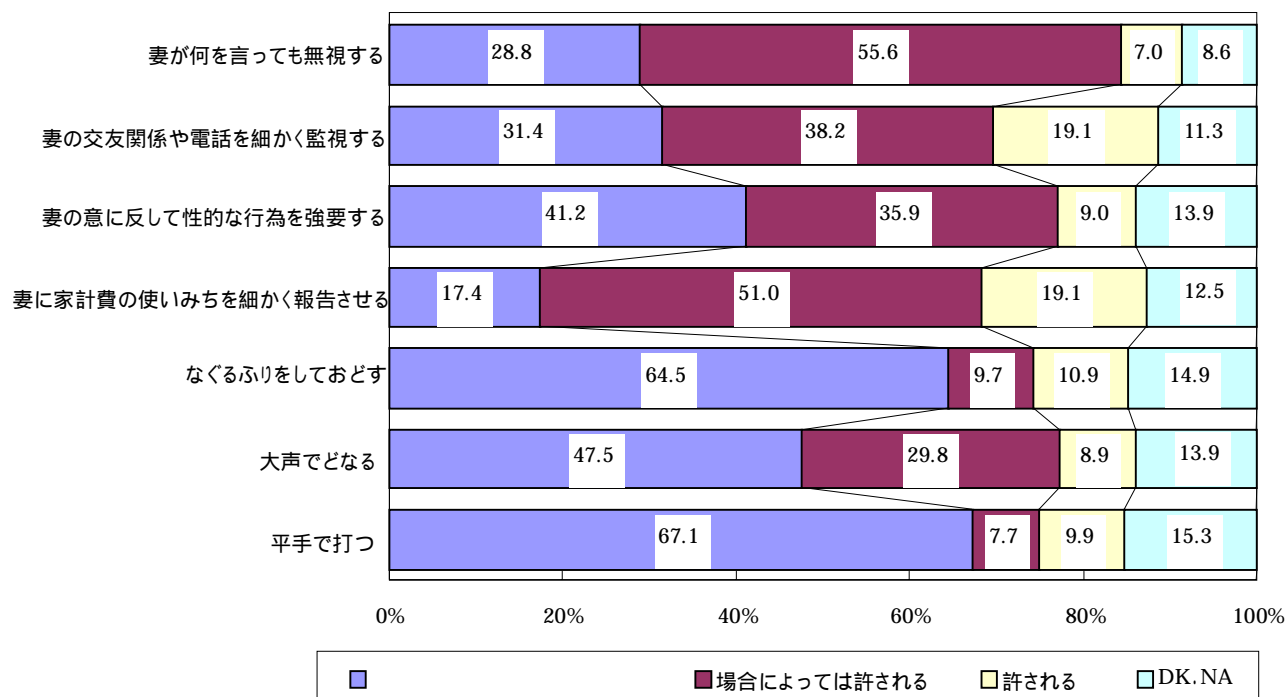
「なぐるふりをして、おどす」については、64.5%(828人)が「どんなことがあっても許されない」としている。「場合によっては許される」の9.7%(125人)と「許される」の10.9%(140人)を合わせても約2割にとどまり、「許されない」と回答した人を下回っている。

「大声でどなる」については、「どんなことがあっても許されない」が47.5%(610人)である。「場合によっては許される」が29.8%(382人)、「許される」が8.9%(114人)と、大声でどなることを許容する人はしない人よりも少ない。

「平手で打つ」については、「どんなことがあっても許されない」が67.1%(862人)と、許容しない人が7項目中もっとも多い。これに対し、「場合によっては許される」が7.7%(99人)、「許される」が9.9%(127人)と、合計しても2割を切っている。

以上をまとめると、「無視」、「交友関係や電話の監視」、「性的な行為の強要」、「家計費を報告させる」の4項目において許容する人の方が多く、「なぐるふり」、「大声でど

なる」、「平手で打つ」の3項目において許容しない人の方が多くなっている。おおむね、身体的暴力に分類される項目の許容度が低いことがうかがえる。

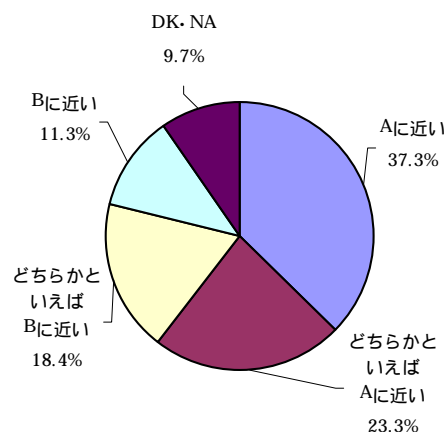


問 9 暴力への許容

4.3.3 夫が妻にけがを負わせるほどの暴力をふるった時の対応の仕方について【問 22】

夫が妻にけがを負わせるほどの暴力をふるった時の対応の仕方について尋ねた。「A：当事者や家族のあいだで解決しよう努力すべきだ」「B：警察や相談機関などにかかわってもらうべきだ」の2つの考えのうち、どちらを支持するかを聞いた。

「A：当事者や家族のあいだでの解決」が37.3%（479人）ともっとも多く、「どちらかといえば当事者や家族のあいだでの解決」23.3%（299人）を合わせると、6割を超える人が家族内での対処を支持している。「どちらかといえば警察や相談機関」が18.4%（236人）、「B：警察や相談機関」が11.3%（145人）と、第三者の介入を支持する人は3割を下回っている。



問22 暴力への対応の考え方

5. 暴力経験

全 21 項目の設問を設け、夫から暴力を受けた経験の有無と頻度、そして暴力の形態について質問をした。

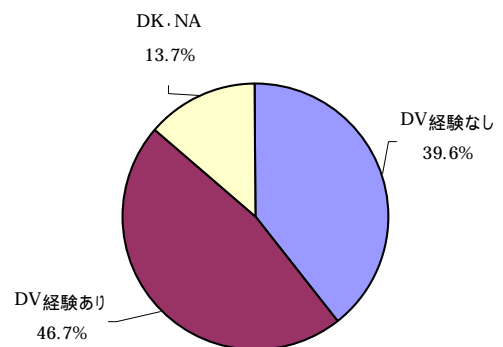
5.1 暴力を受けた経験の有無と頻度について【問 10】

項目別に見ると、経験した人がもっとも多いのが、「命令口調でものを言われたり、怒鳴られた」で 37.7% (484 人) となっている。「何度もされたことがある」と回答した人が 11.1% (142 人)、3 割弱 (26.6%、342 人) が「一、二度されたことがある」と回答している。

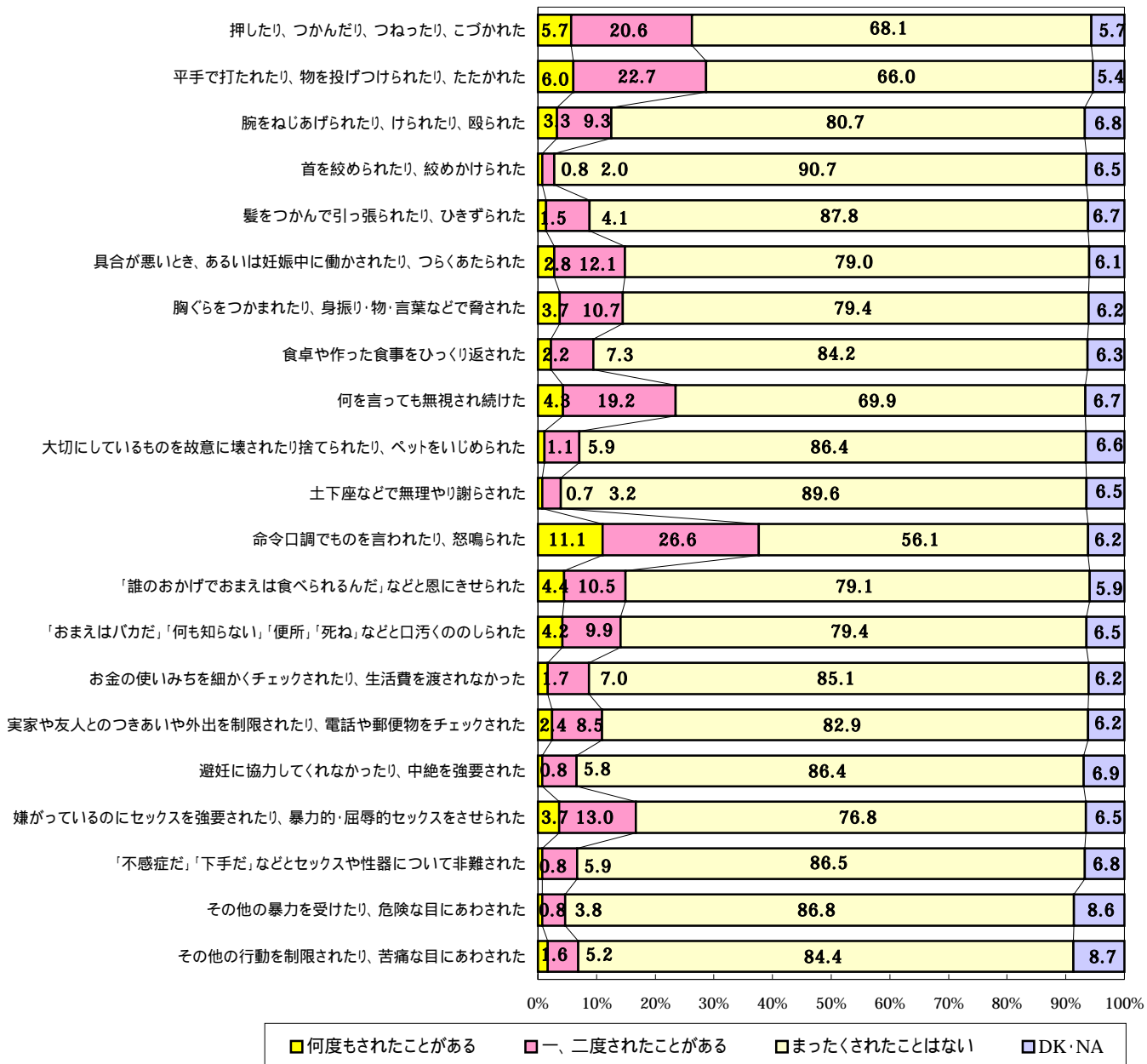
二番目に多いのが「平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた」で、「何度もされたことがある」6.0% (77 人) と「一、二度されたことがある」22.7% (291 人) を合わせると、28.7% (368 人) となっている。

さらに、暴力の経験全体の有無を調べるため、21 項目の設問の回答を合計した合成尺度を用いて分析した (合成尺度は、各項目の「何度もされたことがある」と「一、二度されたことがある」を 1、「まったくされたことはない」を 0 として点数化した)。

回答者 1,284 人のうち、21 項目のうちひとつでも「何度もされたことがある」または「一、二度されたことがある」と回答した人は 46.7% (600 人) であり、まったく暴力を受けた経験がないと回答した 39.6% (508 人) よりも多い。暴力経験者の受けた暴力の平均項目数は約 5 項目である。31.0% (398 人) が 21 項目のうち 1~5 項目の暴力を、10.6% (136 人) が 6~10 項目の暴力を、5.1% (66 人) は 11~21 項目の暴力を経験している。



問10.1 暴力経験の有無



問10.2 暴力を受けた経験

5.2 暴力の形態について【問 10】

次に、21 項目（A～U）を、「身体的暴力」（A～G の 7 項目）、「精神的暴力」（H～N の 7 項目）、「経済的・社会的暴力」（O と P の 2 項目）、「性的暴力」（Q～S の 3 項目）に分けて記述する。「その他の暴力」（T）と「その他の行動の制限」（U）2 項目に該当する人には、問 11 においてその内容を自由に記述してもらった。なお、「実家の友人とのつきあいや外出を制限されたり、電話や郵便物をチェックされた」（P）を「精神的暴力」に分類している調査もあるが、本調査では、こうした行為が妻の社会的関係を制限あるいは監視するという点を重視し、「社会的暴力」に入れた。

以下では、「何度もされたことがある」「一、二度されたことがある」と回答した暴力を受けた経験のある人の割合を、暴力の形態ごとに見ていく。

5.2.1 身体的暴力

回答者のうち、身体的暴力を受けていると回答した人は 37.5%（481 人）であり、約 4 割の人が何らかの身体的な暴力の被害にあっていた。

各項目を暴力を受けた経験の有無で見ると、「平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた」28.7%（368 人）、「押ししたり、つかんだり、つねったり、こぶかれた」26.3%（337 人）で、3 割弱が経験しており目立っている。その他、多い順に並べると「具合が悪いとき、あるいは妊娠中に働かされたり、つらくあたられた」14.9%（191 人）、「胸ぐらをつかまれたり、身振り・物・言葉などで脅された」14.4%（186 人）、「腕をねじあげられたり、けられたり、殴られた」12.6%（161 人）、「髪をつかんで引っ張られたり、ひきずられた」5.6%（72 人）、「首を絞められたり、絞めかけられた」2.8%（36 人）となっている。

5.2.2 精神的暴力

精神的暴力を受けていると回答した人はやや半数に近い 44.5%（572 人）であり、暴力の 4 形態の中でもっとも多い。

各項目を暴力を受けた経験の有無で見ると、「命令口調でものを言われたり、怒鳴られた」37.7%（484 人）がもっとも多く、4 割弱が経験している。その他を多い順にあげると、「何を言っても無視され続けた」23.5%（301 人）、「『誰のおかげでおまえは食べられるんだ』などと恩にきせられた」14.9%（192 人）、「口汚くののしられた」14.1%（181 人）、「食卓や作った食事をひっくり返された」9.5%（122 人）、「大切にしているものを故意に壊されたり捨てられたり、ペットをいじめられた」7.0%（90 人）、「土下座などで無理やり謝らされた」3.9%（50 人）となっている。

5.2.3 経済的・社会的暴力

経済的・社会的暴力を受けていると答えた人は 14.8%（190 人）であった。

各項目を暴力を受けた経験の有無で見ると、「お金の使いみちを細かくチェックされ

たり、生活費を渡されなかった」8.7%（112人）、「実家や友人とのつきあいや外出を制限されたり、電話や郵便物をチェックされた」10.9%（140人）と、いずれも1割程度の経験である。

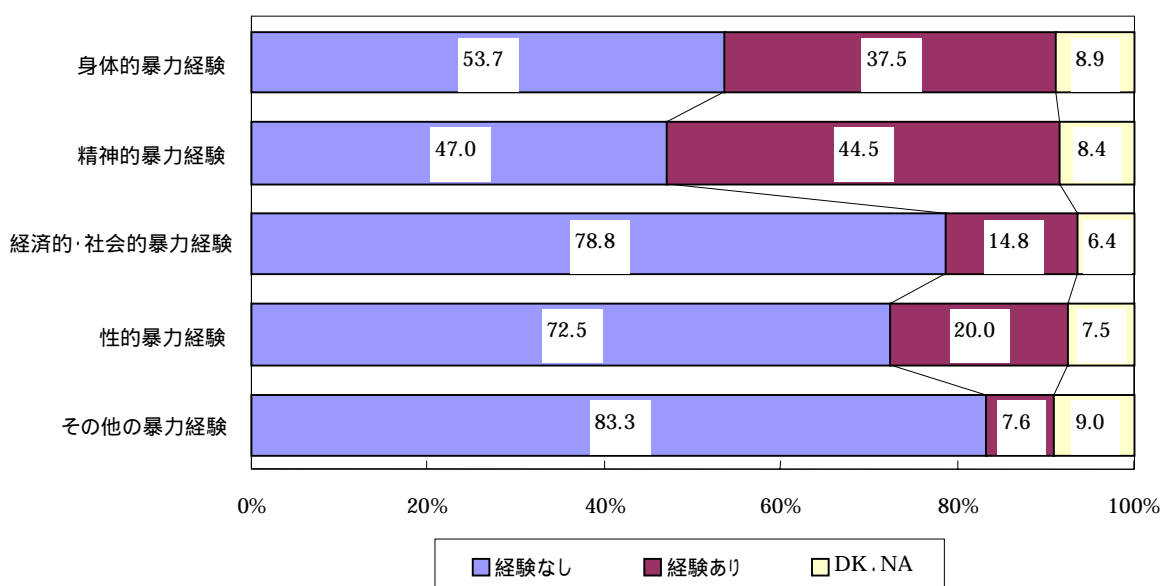
5.2.4 性的暴力

性的暴力を受けていると答えた人は20.0%（257人）であった。

各項目を暴力を受けた経験の有無で見ると、「セックスの強要、暴力的・屈辱的セックス」が16.7%（214人）ともっとも多く、他の二つの経験に比べて目立っている。「避妊に協力しない、中絶の強要」6.6%（85人）と「セックスや性器についての非難」6.7%（86人）は、ほぼ同じ割合になっている。

5.2.5 その他の暴力【問11】

その他の暴力を受けていると答えた人は7.6%（98人）であった。記述されていた33回答の中で、もっとも多かったものは、「お酒による暴力」で22人であった。次いで「夫の浮気」が5人、「ギャンブル」が3人、「過度に行動を監視される」が2人、「お酒による暴力とギャンブル」の両方が1人であった。



問10.3 暴力の経験（形態別）

5.3 受けた暴力のなかでもっとも長く続いた暴力について【問12】

何らかの暴力を受けた経験がある600人に、受けた暴力のなかでもっとも長く続いた（続いている）暴力の種類についてたずねた。回答者数は502人である。

暴力の形態ごとに、もっとも長く続いた（続いている）順番を見ると、精神的暴力

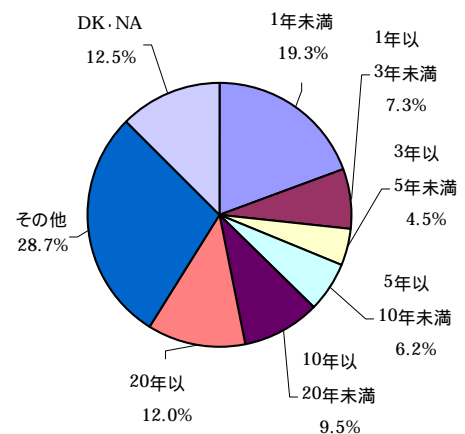
(64.4%、323人)、身体的暴力(21.1%、106人)、性的暴力(7.8%、39人)、経済的・社会的暴力(6.1%、31人)、その他の暴力(0.6%、3人)となっている。

項目ごとに見ると、「命令口調でものを言われたり、怒鳴られた」36.5%(183人)がもっとも多く、唯一3割を超えている。その他多い順に、「何を言っても無視され続けた」15.5%(78人)、「平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた」8.2%(41人)、「押したり、つかんだり、つねったり、こぶかれた」6.8%(34人)となっており、「『誰のおかげでおまえは食べられるんだ』などと恩にきせられた」「口汚くのしられた」「セックスの強要、暴力的・屈辱的セックス」の3項目が同じ5.8%(29人)で続いている。

5.4 暴力の継続期間について【問13】

暴力を受けた経験がある600人に、暴力がどのくらい続いたか(続いているか)聞いた。回答者数は525人である。

「その他」が全体の28.7%(172人)ともっとも多い。このうち、47人が「一、二度だけ」と回答しており、継続性のないその場限りの暴力が多いことを示している。次いで、「1年未満」が19.3%(116人)と、全体のおよそ2割である。しかしその一方で、「20年以上」が12.0%(72人)、「10年以上20年未満」9.5%(57人)と、全体の4分の1を超える人が10年以上暴力を受けている。



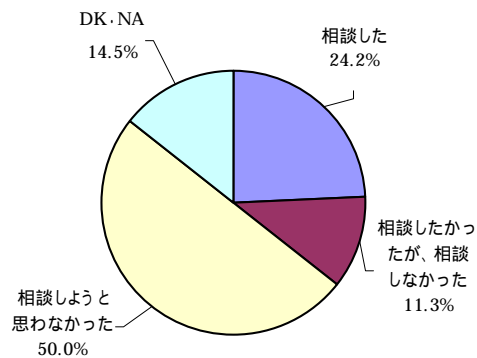
問13 暴力の継続期間

5.5 暴力の相談と暴力への対応について

5.5.1 相談の有無【問14】

暴力を受けた経験がある600人に、そのことについて誰かに相談したかどうかを尋ねた。回答者数は513人である。

「相談しようと思わなかった」が50.0%(300人)であり、全体の半数になっている。また、「相談した」が24.2%(145人)、「相談したかったが、相談しなかった」が11.3%(68人)となっている。実際に相談したかどうかにかかわらず、誰かに相談することを思い立った人は全体のおよそ4割にとどまっていることがわかる。

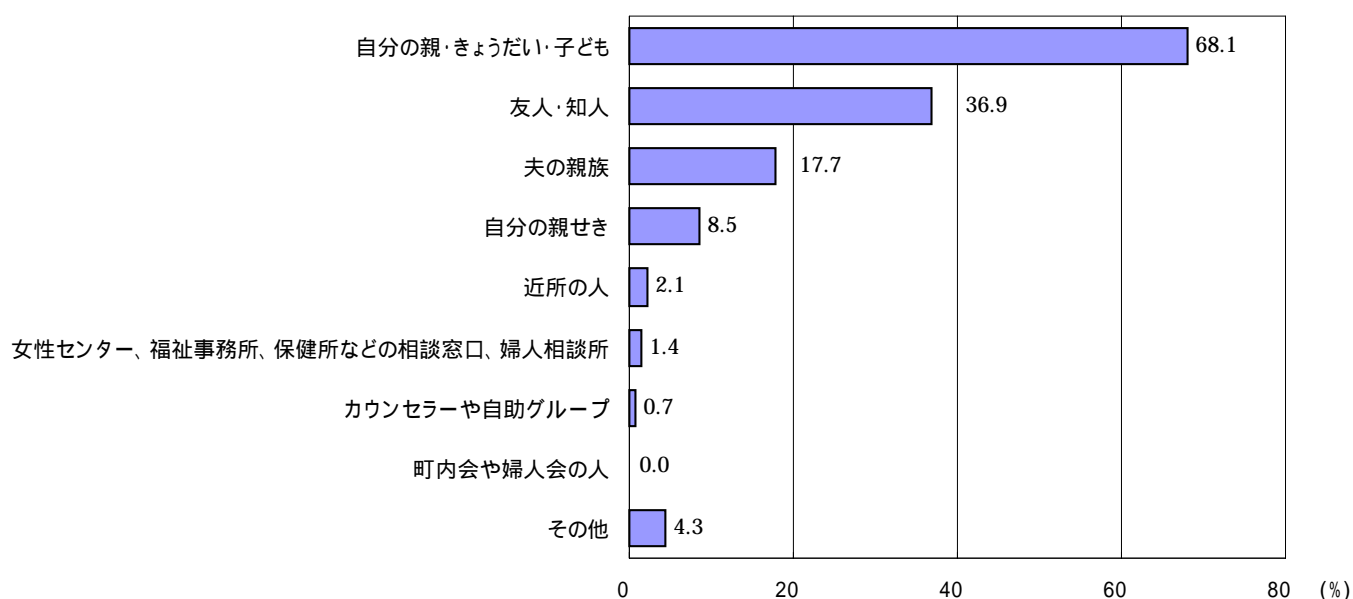


問14 相談経験の有無

5.5.2 相談相手【問 15】

暴力について「相談した」と答えた人145人に、だれに（どこに）相談したかを聞いた（複数回答）。回答者数は141人である。

「自分の親・きょうだい・子ども」がもっとも多く、68.1%（96人）の人が選んでいる。次いで「友人・知人」が36.9%（52人）で、「夫の親族」17.7%（25人）、「自分の親せき」8.5%（12人）と続いている。「近所の人」、「女性センター、福祉事務所、保健所などの相談窓口、婦人相談所」が若干名にすぎず、「町内会や婦人会の人」と回答した人は1人もいなかった。また、「その他」が計6回答あり、その内訳は「警察署」「家庭裁判所」「診療所の先生」「医師（婦人科）」「牧師」「祈祷師」である。

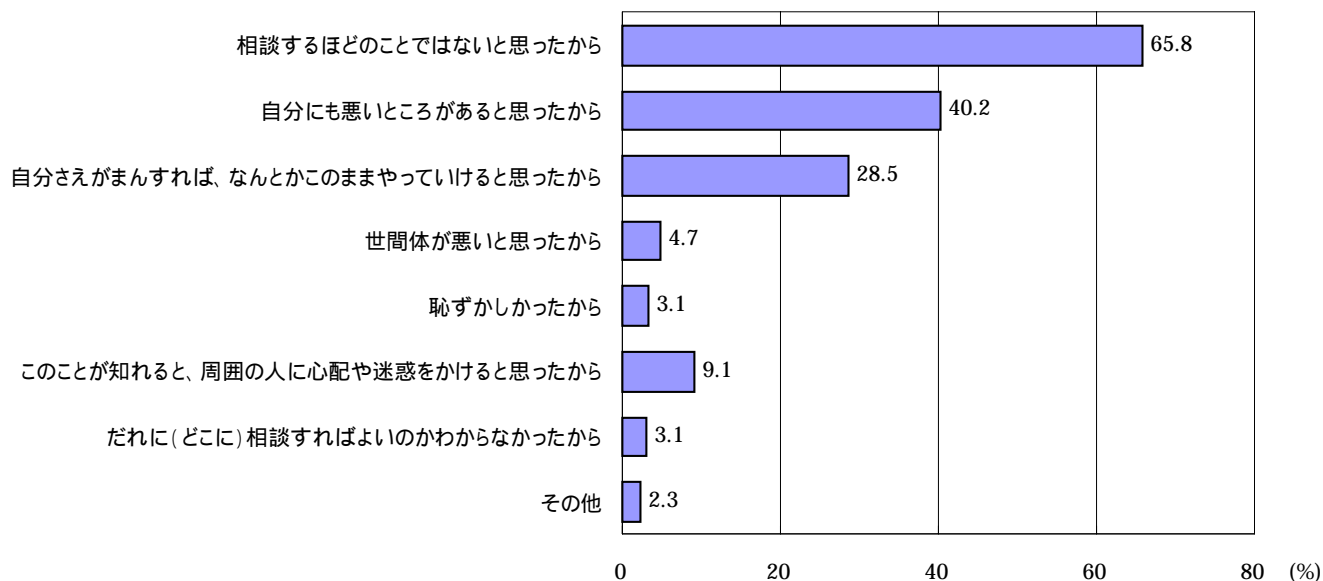


問15 相談相手

5.5.3 相談しなかった理由【問 16】

「相談したかったが、相談しなかった」または「相談しようと思わなかった」と回答した人 368 人に、相談しなかった理由を明記した 15 人を加えた 383 人を対象に、相談しなかった理由を聞いた（複数回答）。もっとも多いのが「相談するほどのことでもないと思ったから」で、65.8%（252人）が回答している。このことから、相談しなかった人の6割以上が夫からの暴力を過小評価していることがわかる。次いで「自分にも悪いところがあると思ったから」の40.2%（154人）で、およそ4割の人が自分に責任を感じている。その他多い順に、「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」28.5%（109人）、「このことが知れると、周囲の人に心配や迷惑をかけると思ったから」9.1%（35人）、「世間体が悪いと思ったから」4.7%（18人）、「誰に（どこに）相談してよいのかわからなかったから」と「恥ずかしかったから」

はそれぞれ 3.1% (12 人) となっている。

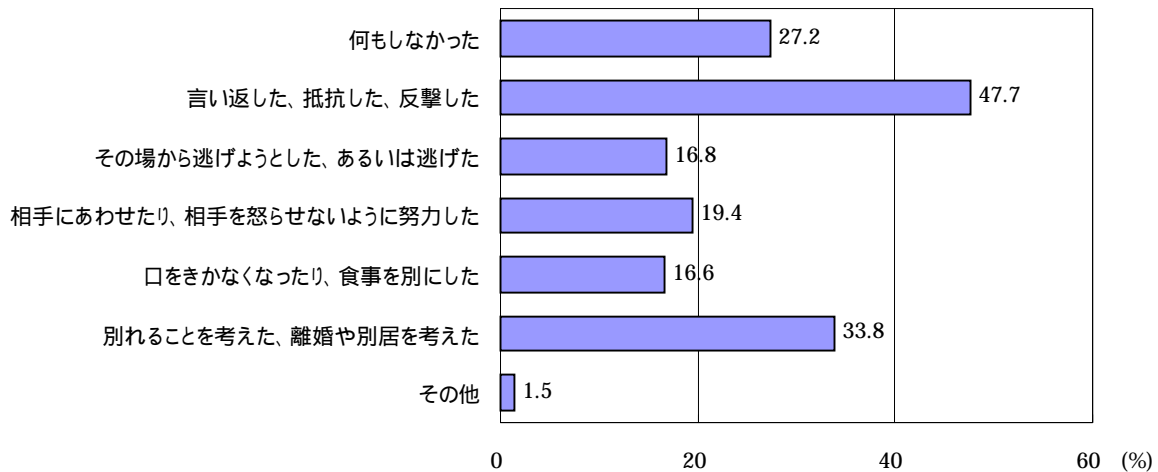


問16 相談しなかった理由

5.5.4 暴力への対応【問 17】

暴力を受けた経験がある 600 人に、暴力を受けたときにどのような対応をとったかについて尋ねた(複数回答)。回答者数は 541 人である。

その対応のうちでもっとも多いのが、「言い返した、抵抗した、反撃した」の 47.7% (258 人) である。次いで「別れることを考えた、離婚や別居を考えた」の 33.8% (183 人) で、暴力を受けた人の 3 割強が離婚や別居を考えている。その他多い順に並べると、「相手にあわせたり、相手を怒らせないように努力した」19.4% (105 人)、「その場から逃げようとした、あるいは逃げた」16.8% (91 人)、「口をきかなくなった、食事を別にした」16.6% (90 人) となっている。27.2% (147 人) が「何もしなかった」と回答しており、暴力を受けた人のうち 7 割以上が何らかの対応をとっていることになる。

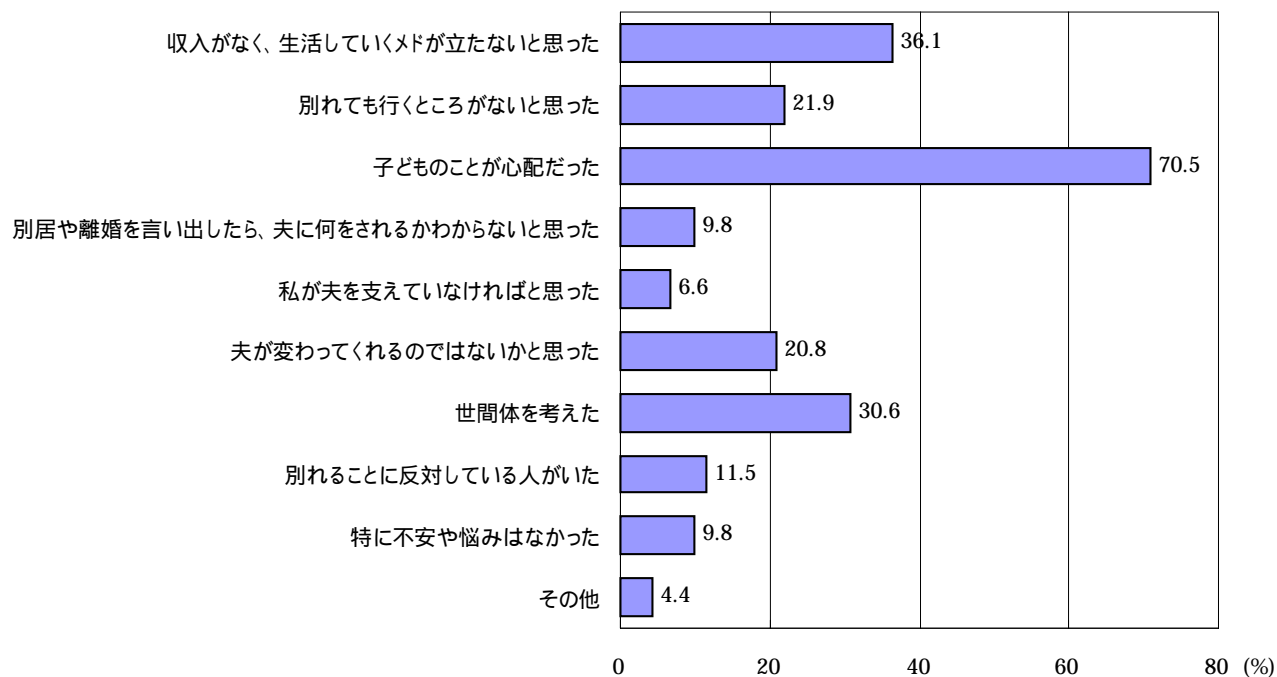


問17 暴力への対応

5.6 離婚や別居にともなう不安や悩み【問 18】

「別れることを考えた、離婚や別居を考えた」と回答した 183 人に、夫と別れることにとともなう不安や悩みを尋ねた（複数回答）。

目立って多いのが「子どものことが心配だった」で、70.5%（129 人）の人が回答している。次いで「収入がなく、生活していくメドが立たないと思った」が 36.1%（66 人）と、4 割近くの人が離婚・別居後の生活に不安を抱えていることがわかる。三番目に多いのが「世間体を考えた」で 30.6%（56 人）である。その他多い順に、「別れても行くところがないと思った」21.9%（40 人）、「夫が変わってくれるのではないかと思った」20.8%（38 人）、「別れることに反対している人がいた」11.5%（21 人）、「離婚や別居を言い出したら、夫に何をされるかわからないと思った」と「特に不安や悩みはなかった」が同じ 9.8%（18 人）、「私が夫を支えていなければと思った」6.6%（12 人）と続いている。夫の改心を期待している人がおよそ 2 割、夫の仕返しを恐れている人がおよそ 1 割いることがわかる。



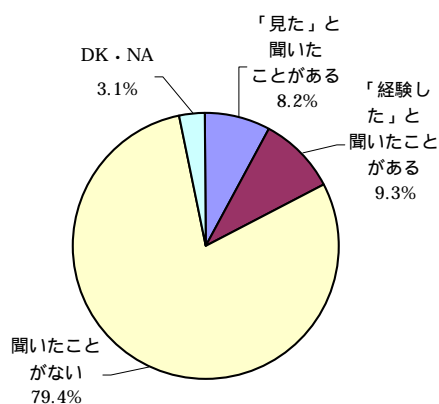
問18 離別にもなう不安や悩み

5.7 暴力を見聞きした経験の有無

5.7.1 配偶者の暴力の経験・見聞の有無【問 19】

回答者全員に、配偶者が生まれ育った家庭の中で暴力を見た、あるいは経験したという話を聞いたことがあるかを尋ねた。

「聞いたことがない」と回答した人が圧倒的に多く、79.4%（1,019人）である。その一方で、「『見た』と聞いたことがある」が8.2%（105人）、「『経験した』と聞いたことがある」が9.3%（120人）と、いずれも1割近くに上っている。



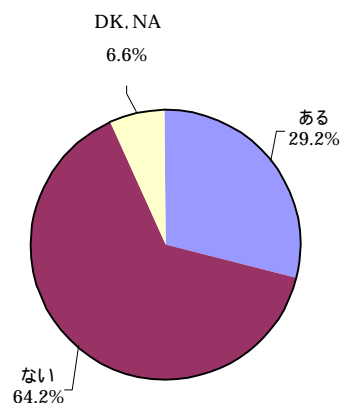
問19 配偶者の暴力の経験・見聞

5.7.2 よその夫婦の暴力に関する見聞の有無

【問 20】

回答者全員に、夫から妻に対する暴力を身近で見聞きした経験があるかどうかを聞いた。

「ある」と回答した人は 29.2%（375 人）であった。これに対し、「ない」と回答した人が 64.2%（824 人）であった。



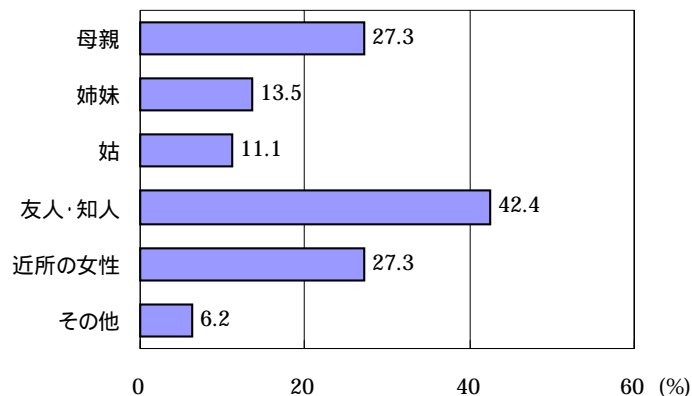
問 20 よその夫婦の暴力に関する見聞

5.7.3 暴力の被害者として誰を知っているか

【問 21】

夫から妻に対する暴力を身近で見聞きした経験が「ある」と回答した人（375 人）に、その被害者として誰を知っているか尋ねた（複数回答）。回答者数は 370 人であった。

もっとも多いのが「友人・知人」で、42.4%（157 人）であった。また、「母親」と「近所の女性」が同じ 27.3%（101 人）で続き、「姉妹」13.5%（50 人）、「姑」11.1%（41 人）、「その他」6.2%（23 人）となっている。



問21 暴力の被害者

詳細分析 暴力と関連する要因

今回、ドメスティック・バイオレンスがどういう要因と関連しているのかについて、いくつかの分析を行った。その結果、以下のことが判明した。

1. 年齢、婚姻年数、世帯人数との関係

夫からの暴力の経験と、回答者の年齢、配偶者の年齢は関係しない。つまり、夫からの暴力の経験は、年齢を問わずその被害者となりうるものであり、年輩者だけのものではない。また、結婚期間も関係しない。自由記述においては、年をとって夫の暴力がおさまってきたと回答した女性が数名いたものの、全体として分析した結果では、長く婚姻関係にあれば暴力がなくなっていくという傾向はみられなかった。

また、同居家族が多いほど、夫からの暴力を受けた経験は少なく、家庭内での夫婦以外の存在が、暴力にブレーキをかける傾向がみられる（表2）。

表2 受けた暴力の頻度と各変数の相関係数
（ピアソンの積率相関係数）

	受けた暴力の頻度
世帯構成員数	.078*
配偶者の年収	.066*

* p < .05

2. 職業・職業形態・年収との関係

ドメスティック・バイオレンスは、妻が仕事をもっているかどうかにかかわらず存在するといわれているが、本調査では、職種によって差があることが明らかになった。すなわち、家族従業・自営業の人は、より暴力を経験する傾向にあり、経営・専門・事務職に従事している人は、比較的暴力を受けにくい傾向がある（表3）。家族従業や自営の場合、夫とともに働いている可能性が高く、その場合、長時間一緒におり、経済的にも夫の監視・管理のもとに収入を得ることになるため、より暴力を受けやすい立場になるのではないかと推察される。

また、勤め人のなかでは、常勤（フルタイム）の人より、パートタイムやアルバイトなど非常勤の女性の方が、暴力を経験しているという結果が出た（表4）。これは、パートやアルバイトなどの女性の方が、経済的に独立しにくいいためなのか、あるいは暴力を受けているためにフルタイムでは働けないのか、さらなる検討が必要である。

また、夫からの暴力の経験は、夫の年収と逆相関をみせており、夫の経済的能力や家族内での経済的なバランスが暴力のひとつの要因になっている可能性が高い（表2）。

表3 回答者の職業

数値：% ()内は実数

	暴力を受けた経験なし	暴力を受けた経験あり	計
家族従業・自営業	40.0 (106)	60.0 (159)	100.0 (265)
経営・専門・事務職	54.7 (98)	45.3 (81)	100.0 (179)
労務・販売・サービス業	45.3 (115)	54.7 (139)	100.0 (254)
無職	47.9 (162)	52.1 (176)	100.0 (338)
計	46.4 (481)	53.6 (555)	100.0 (1036)

$\chi^2 = 9.827$ $p < .05$

表4 回答者の職業形態

数値：% ()内は実数

	暴力を受けた経験なし	暴力を受けた経験あり	計
常勤	53.1 (146)	46.9 (129)	100.0 (275)
非常勤	41.0 (64)	59.0 (92)	100.0 (156)
計	48.7 (210)	51.3 (221)	100.0 (431)

$\chi^2 = 5.800$ $p < .05$

3. 夫婦間の意見調整との関係

暴力の体験の有無と夫婦間での意見が異なる場合の対処法との関係をみたところ、暴力を経験している人の方が、自分の夫が「場合によっては、力づくで解決することもやむをえない」と考えているだろうと回答している割合が高いのは当然といえるが（表6）、回答者自身も、暴力を経験している人の方が、「場合によっては、力づくで解決することもやむをえない」と答える人が多くなり「どんなことがあっても、話し合っ解決する」という意見が少なくなっている（表5）。

表5 夫婦間で意見がくい違ったときの解決方法 - 回答者の意見

数値：% ()内は実数

	Aに近い	どちらかといえ ばAに近い	どちらかといえ ばBに近い	Bに近い	計
暴力を受けた経験なし	61.8 (309)	34.4 (172)	3.6 (18)	0.2 (1)	100.0 (500)
暴力を受けた経験あり	51.7 (308)	40.9 (244)	5.0 (30)	2.3 (18)	100.0 (596)
計	56.3 (617)	38.0 (416)	4.4 (48)	1.4 (15)	100.0 (1096)

$\chi^2 = 18.463$ $p < .001$

注：Aは「どんなことがあっても、話し合っ解決する」、

Bは「場合によっては、力づくで解決することもやむを得ない」を表す

表 6 夫婦間で意見がくい違ったときの解決方法 - 回答者の考える夫の意見

数値：% ()内は実数

	Aに近い	どちらかと いえば Aに近い	どちらかと いえば Bに近い	Bに近い	計
暴力を受けた経験なし	56.4 (268)	36.6 (174)	5.3 (25)	1.7 (8)	100.0 (475)
暴力を受けた経験あり	35.8 (208)	38.4 (223)	18.1 (105)	7.7 (45)	100.0 (581)
計	45.1 (476)	37.6 (397)	12.3 (130)	5.0 (53)	100.0 (1056)

$\chi^2 = 78.826$ $p < .001$

注：Aは「どんなことがあっても、話し合っ解決する」

Bは「場合によっては、力づくで解決することもやむを得ない」を表す

4. 決定権との関係

家庭内でのいくつかの事柄に関する決定のしかたと、暴力との関係をみたところ、夫の小づかい、家庭外活動、生活費、生活全般のすべてにおいて、暴力を経験していない場合は、夫と話し合っ決定するという人が多いという結果となった。つまり、暴力の経験の有無は、夫婦間の話し合いや協力と大きく関係している(表7~表10)。

表 7 夫の小づかいに関する決定権

数値：% ()内は実数

	主として 夫が決定	夫と回答者が 話し合っ決定	主として 回答者が決定	計
暴力を受けた経験なし	34.3 (151)	48.4 (213)	17.3 (76)	100.0 (440)
暴力を受けた経験あり	43.0 (235)	35.5 (194)	21.4 (117)	100.0 (546)
計	39.1 (386)	41.3 (407)	19.6 (193)	100.0 (986)

$\chi^2 = 16.674$ $p < .001$

表 8 回答者の家庭外活動に関する決定権

数値：% ()内は実数

	主として 夫が決定	夫と回答者が 話し合っ決定	主として 回答者が決定	計
暴力を受けた経験なし	2.8 (13)	46.3 (217)	51.0 (239)	100.0 (469)
暴力を受けた経験あり	6.2 (35)	40.1 (226)	53.7 (303)	100.0 (564)
計	4.6 (48)	42.9 (443)	52.5 (542)	100.0 (1033)

$\chi^2 = 9.164$ $p < .05$

表 9 生活費に関する決定権

数値：% ()内は実数

	主として 夫が決定	夫と回答者が 話し合って決定	主として 回答者が決定	計
暴力を受けた経験なし	10.5 (50)	46.2 (221)	43.3 (207)	100.0 (478)
暴力を受けた経験あり	13.5 (78)	35.5 (205)	51.0 (294)	100.0 (577)
計	12.1 (128)	40.4 (426)	47.5 (501)	100.0 (1055)

$\chi^2 = 12.655$ $p < .01$

表 10 その他のこと全般に関する決定権

数値：% ()内は実数

	主として 夫が決定	夫と回答者が 話し合って決定	主として 回答者が決定	計
暴力を受けた経験なし	10.1 (47)	78.6 (367)	11.3 (53)	100.0 (467)
暴力を受けた経験あり	17.5 (98)	70.1 (393)	12.5 (70)	100.0 (561)
計	14.1 (145)	73.9 (760)	12.0 (123)	100.0 (1028)

$\chi^2 = 12.688$ $p < .01$

5. 暴力の見聞との関係

ドメスティック・バイオレンスの加害・被害経験ともに、世代間連鎖や生育環境での暴力的な経験との関連がこれまでに指摘されてきた。本調査では、この関連をみるため、「あなたの配偶者（夫）が生まれ育った家庭の中で暴力を見た、あるいは経験したという話を夫から聞いたことがありますか」という質問を設けた。その結果、夫からの暴力を経験している人の方が、夫が暴力を見聞きしたと回答する割合が高いという結果が得られた（表 11）。また、回答者自身も、暴力を経験している人の方が、自分が過去に身近で暴力を見聞きしたと回答する割合が高い（表 12）。

表 11 夫の暴力の見聞・経験

数値：% ()内は実数

	「見た」と 聞いた ことがある	「経験した」と 聞いた ことがある	聞いたことが ない	計
暴力を受けた経験なし	6.0 (30)	5.4 (27)	88.6 (442)	100.0 (499)
暴力を受けた経験あり	11.1 (65)	13.5 (79)	75.4 (441)	100.0 (585)
計	8.8 (95)	9.8 (106)	81.5 (883)	100.0 (1084)

$\chi^2 = 31.782$ $p < .001$

表 12 妻の暴力の見聞

数値：% ()内は実数

	見聞きした ことがある	見聞きした ことはない	計
暴力を受けた経験なし	24.0 (117)	76.0 (371)	100.0 (488)
暴力を受けた経験あり	38.7 (217)	61.3 (344)	100.0 (561)
計	31.8 (334)	68.2 (715)	100.0 (1049)

$\chi^2 = 26.006$ $p < .001$

6. 満足度との関係

生活や家族関係に対する満足度と暴力との関係を見ると、夫との関係、子どもとの関係、家庭内の他の人との関係、生活全般のすべてにおいて、暴力を経験している人は、経験していない人よりも不満を感じている割合が高い(表 13~表 16)。暴力は、夫との関係のみならず、妻の家族生活全体における満足に大きな影響を及ぼすことがわかる。

表 13 夫との関係に対する満足度

数値：% ()内は実数

	満足している	不満である	計
暴力を受けた経験なし	94.8 (472)	5.2 (26)	100.0 (498)
暴力を受けた経験あり	74.4 (438)	25.6 (151)	100.0 (589)
計	83.7 (910)	16.3 (177)	100.0 (1087)

$\chi^2 = 82.507$ $p < .001$

表 14 子どもとの関係に対する満足度

数値：% ()内は実数

	満足している	不満である	計
暴力を受けた経験なし	97.5 (466)	2.5 (12)	100.0 (478)
暴力を受けた経験あり	92.2 (521)	7.8 (44)	100.0 (565)
計	94.6 (987)	5.4 (56)	100.0 (1043)

$\chi^2 = 14.192$ $p < .001$

表 15 家庭内の他の人との関係に対する満足度

数値：% ()内は実数

	満足している	不満である	計
暴力を受けた経験なし	86.5 (385)	13.5 (60)	100.0 (445)
暴力を受けた経験あり	74.7 (380)	25.3 (129)	100.0 (509)
計	80.2 (765)	19.8 (189)	100.0 (954)

$\chi^2 = 21.024$ $p < .001$

表 16 生活全般に対する満足度

数値：% ()内は実数

	満足している	不満である	計
暴力を受けた経験なし	91.4 (445)	8.6 (42)	100.0 (445)
暴力を受けた経験あり	78.7 (458)	21.3 (124)	100.0 (509)
計	84.5 (903)	15.5 (166)	100.0 (954)

$\chi^2 = 32.507$ $p < .001$

まとめ

ドメスティック・バイオレンスの日本での調査は 90 年代に始まった。最初の本格的な調査は、1995 年に出された「夫（恋人）からの暴力」調査研究会の調査報告書といわれている。その後、いくつかのアンケート調査やインタビュー調査がなされてきたが、それらは、ほとんど都市中心に行われてきた。都市以外の地域に特に焦点をあてて、定量的に調査したのは、おそらく本調査が初めてではないかと思われる。農村地域の特徴を明らかにするためには、正確には、次年度行う予定の都市部での調査との比較が必要であるので、本調査だけの結果から地域の特徴を抽出することはできない。しかし、今回の調査地域について、ドメスティック・バイオレンスの意識と実態として以下のような 4 つの傾向があることがわかった。

1. 暴力体験の多さ

まず、想像していた以上に暴力を経験している人が多い。何らかの暴力を受けたことがある人が 46.7%と、まったく受けたことのない人 39.6%よりも多い（残りは無効回答）。もっとも多いのは、「命令口調でものを言われたり、怒鳴られたりした」の 37.7%だが、「平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた」ことのある人が 28.7%、「押したり、つかんだり、つねったり、こづかれた」ことのある人が 26.3%と、直接的な身体的暴力を経験している人も少なくない。回答者のうち、このような何らかの直接の身体的暴力を経験した人は、37.5%にのぼった。言葉での暴力を中心とした精神的暴力の経験者は 44.5%とさらに多い。「セックスの強要、暴力的・屈辱的セックス」などの性的な暴力も 20.0%と 5 人に 1 人が経験している。夫から妻に対する暴力を身近で見聞きした経験があるという回答も 3 割あり、暴力が珍しい現象ではないことを物語っている。「命令口調でものを言われたり、怒鳴られたりした」など精神的暴力は、けんかの一部と受け取られがちだが、何年にもわたって継続しているという回答も多く、妻が一方的に精神的暴力を受けている可能性が高い。また、暴力を受けた人の 33.6%は離婚や別居を考えており、深刻なものが少なくない。

2. ドメスティック・バイオレンスの認識の低さ

他方で、ドメスティック・バイオレンスに対する認識は低い。60%近い人が、「ドメスティック・バイオレンスという言葉を知らない」と答えている。また、「なぐるふりをして、おどす」「大声でどなる」「平手で打つ」といった身体的暴力に対しては、「どんなことがあっても許されない」という否定的回答が多かったが、「妻

が何を言っても無視する」「妻の交友関係や電話を細かくチェックする」など、精神的、経済的、社会的、性的暴力については、場合によっては許されるという、許容度の高い回答が多かった。また、暴力を経験している人の方が、夫婦間で「どんなことがあっても、話し合っ解決する」という意見が少なく、暴力の経験と、暴力を許容する態度が相互に影響を与え合っ悪循環をおこしている可能性もある。

3. 家族関係への依存

夫から暴力を受けた場合の相談相手は、7割が自分の親・きょうだい・子どもと答えており、夫が妻にけがを負わせるほどの暴力をふるった時の対応も、当事者や家族のあいだで解決すべきだと考える人が多い。この場合第三者の介入を支持する人は3割に満たない。ドメスティック・バイオレンスは、他人が介入できない家族的問題と考えている人が多いのである。

4. 暴力が家庭生活に与える悪影響

ドメスティック・バイオレンスが夫婦関係や家庭生活に悪影響を与えることは、容易に想定できることだが、本調査は、その影響を具体的に明らかにした。夫から暴力を受けたことがあると、夫の小づかい、生活費、妻の家庭外活動といった家庭内で決定する事柄に関して、夫婦が話し合っ決めるということが少ない。やはり、暴力があると夫婦の協力関係がなくなる（あるいは協力関係がないから暴力にいたるのかもしれないが）ようである。また、夫婦関係をはじめ、家庭生活に対する満足度は低くなる。

こうした今回の調査結果をもとに、今後、大都市地域との比較をへて、ドメスティック・バイオレンスの原因や対策などをさらに掘り下げていきたい。

【参照文献】

- 地域社会における女性のエンパワーメント DV 研究会, 1999, 『女性たちは暴力の中をどう生き抜いたか 母たちの世代への聞き取りから』地域社会における女性のエンパワーメント DV 研究会.
- 江原由美子編, 1998, 『性・暴力・ネーション』勁草書房.
- 後藤弘子, 2000, 「ドメスティック・バイオレンスとその刑事的対応」『警察学論集』 53(4): 130 - 144.
- 「女性に対する暴力」研究会, 2000, 『「女性に対する暴力」調査報告書』名古屋市総務局総合調整部男女共同参画推進室.
- 女性と子どもに対する DV 研究グループ, 2001, 『女性への暴力の実態および子どもへの影響 委託調査報告書』財団法人女性のためのアジア平和国民基金.
- 戒能民江, 1997, 「ドメスティック・バイオレンスと性支配」『岩波講座現代の法 11 巻』岩波書店.
- 梶山寿子, 1999, 『女を殴る男たち DV は犯罪である』文芸春秋.
- 国内人権システム国際比較プロジェクト, 2000, 『ワシントン D.C. ドメスティック・バイオレンス法廷調査研究報告書』人権フォーラム 21.
- 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会, 1998, 『ドメスティック・バイオレンス』有斐閣.
- 埼玉県総務部女性政策課, 2000, 『男女共同参画に関する意識・実態調査』埼玉県.
- 仙台女性への暴力調査研究会, 1999, 『仙台市における「女性に対する暴力」実態調査報告書』仙台市男女共同参画課.
- 社団法人家庭問題情報センター, 2000, 『家庭内における女性の尊厳侵害に関する実態調査報告書』財団法人女性のためのアジア平和国民基金.
- 徳島県企画調整部, 2001, 『「女性に関する意識調査」報告書』徳島県.
- 友田尋子・梶山寿子, 2000, 『ドメスティックバイオレンス家庭における女性と子どもの被害』財団法人女性のためのアジア平和国民基金.
- 東京都生活文化局, 1998, 『「女性に対する暴力」調査報告書』.
- Walker, L. E. , 1979, *The Battered Woman*. New York: Harper and Row. (= 1997, 斎藤学監訳『バタードウーマン 虐待される妻たち』金剛出版.)
- Walker, L.E. ,1980, Psychological Cause of Family Violence, In Mary Lystad, (Ed.), *Violence in the home*. New York: Brunner/Mazel, Inc.
- 吉浜美恵子・ゆのまえ知子 シェルター・DV 問題調査研究会議, 2000, 『日本人女性を対象としたドメスティック・バイオレンスの実態調査 日本女性の経験から暴力の本質と根絶のためのビジョンを探る』財団法人横浜市女性協会.
- 財団法人女性のためのアジア平和国民基金, 2001, 『DV 加害者への取り組み アメリカでの手法を参考にして』.
- 財団法人京都市女性協会, 2000, 『京都市女性への暴力に関する市民意識調査報告書』.

謝辞

最後に、この調査に協力して下さった回答者の方々、秋田県雄勝郡羽後町、秋田県平鹿郡山内村、山形県西村山郡大江町、山形県東村山郡中山町、宮城県黒川郡大衡村、宮城県牡鹿郡女川町、宮城県柴田郡川崎町、宮城県遠田郡田尻町、福島県伊達郡梁川町の役場の方々、アルバイトで調査の実施に関わって下さった東北大学文学部行動科学科研究室の院生、学生の方々および支援して下さった同研究室の先生方に感謝いたします。

研究代表者	坂本佳鶴恵（お茶の水女子大学文教育学部助教授）
共同研究者	原純輔（東北大学文学部教授）
	三隅多恵子（東北大学大学院博士後期課程）
	西倉実季（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）
	小島香（お茶の水女子大学大学院博士前期課程）
研究協力	飯塚和子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

付 録 資 料

1 . 調査の日程

年 月 日	計 画 内 容
2001 年 6 月	調査票の質問項目作成のための準備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 農村出身女性へのプレ・インタビュー ・ 第 1 回研究会 ・ DV 先行研究・DV 先行調査の収集・検討
2001 年 7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 町村既婚女性の DV に対する意識・実態モデルの構築、仮説を導く ・ 第 2 回研究会 ・ 調査票作成、調査地域・調査対象者のサンプリング ・ 第 3 回研究会
2001 年 8 月	調査実施のための準備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 予備調査、調査依頼文作成、調査票修正・印刷、調査票郵送準備 ・ 第 4 回研究会
2001 年 9 月	調査票郵送、調査実施期間（3 ヶ月間） <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施期間中の苦情処理開始（午前 8 時 - 午後 6 時）
2001 年 10 月	データ作成開始 <ul style="list-style-type: none"> ・ 回収済み調査票のエディティング開始 ・ 第 1 次督促通知郵送 ・ コーディング開始 ・ アフターコーディング開始 ・ 第 2 時督促通知郵送 ・ 1 目入力開始
2001 年 11 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 度目入力開始
2001 年 12 月	調査終了 調査終了後の全データ・クリーニング <ul style="list-style-type: none"> ・ 全データのロジカル・チェック ・ 第 5 回研究会
2002 年 1 月	データ分析 調査報告書作成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第 6 回研究会
2002 年 1 月 31 日	調査報告書提出

2. 標本抽出地点・抽出数一覧表

地点番号	町村名	標本数
01	秋田県雄勝郡羽後町	170
02	秋田県平鹿郡山内村	160
03	山形県西村山郡大江町	340
04	山形県東村山郡中山町	290
05	宮城県黒川郡大衡村	200
06	宮城県牡鹿郡女川町	340
07	宮城県柴田郡川崎町	320
08	宮城県遠田郡田尻町	340
09	福島県伊達郡梁川町	340
計		2500

(予備票 363 名を含む)

3. 調査票

家庭内の女性の地位と意識に関する調査

2001年8月

調査主体：家族意識研究会
代表：お茶の水女子大学助教授
坂本 佳鶴恵
事務局：東北大学文学部 行動科学研究室内
電話：090 - 1063 - 1379 （担当：三隅）

回収について

ご記入いただいた調査票は、お手数ですが折って返信用封筒に入れ、密封の上、そのままポストに投函してください。切手は不要です。

回収期間：8月25日（土）から9月末日まで

記入上の注意

1. この調査は試験やクイズではありませんから、正しい答えや誤った答えがあるわけではありません。あなた自身のお考えをありのままに記入してください。
2. 答えの欄が一重の枠 で囲まれた質問では、枠内の選択肢の中からあてはまるものを 1つ 選び、その番号を で囲んでください。
3. 答えの欄が二重の枠 で囲まれた質問では、枠内の選択肢の中からあてはまるものを 複数 選び（1つでもかまいません）その番号を で囲んでください。
4. 数字や具体例などを枠内に記入していただく質問については、なるべくくわしく、明確に記入してください。枠内に書ききれない場合には、欄外にご記入ください。
5. 筆記具は、何でもかまいませんが、必ず**黒色**のものをお使いください。また、お答えを訂正するときには、前の答えをしっかりと消すか、×をつけるなどして、訂正したことをはっきりと示してください。
6. なお、この調査の対象者は、配偶者（夫）のいる女性となっておりますので、それ以外の方は、問2以降、未記入の調査票を返信用封筒に入れ、ご返送いただいて構いません。

それでは、ご協力のほど、よろしくお願いたします。

4. 単純集計表

問 1 回答者の年齢

	%
20 歳代	3.1
30 歳代	11.9
40 歳代	24.5
50 歳代	26.1
60 歳以上	34.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 2 配偶者の有無

	%
同居の配偶者がいる	99.3
別居の配偶者がいる	0.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 3 配偶者の年齢

	%
20 歳代	1.9
30 歳代	9.2
40 歳代	20.1
50 歳代	27.0
60 歳代	25.2
70 歳以上 85 歳未満	15.6
DK/NA	0.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 4 婚姻年数

	%
5 年未満	4.4
5 年以上 10 年未満	6.0
10 年以上 15 年未満	6.9
15 年以上 20 年未満	8.4
20 年以上 25 年未満	12.6
25 年以上 30 年未満	12.5
30 年以上 35 年未満	11.1
35 年以上 40 年未満	10.7
40 年以上	25.6
DK/NA	1.8
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 5 配偶者は長男か

	%
はい	60.6
いいえ	38.5
DK/NA	0.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 6A 女は女らしく、男は男らしくする方がよい

	%
そう思う	33.3
どちらかと言えばそう思う	42.4
どちらかと言えばそう思わない	10.6
そう思わない	8.1
DK/NA	5.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 6B 男性は外で働き、女性は家庭を守る方がよい

	%
そう思う	18.0
どちらかと言えばそう思う	32.2
どちらかと言えばそう思わない	18.8
そう思わない	25.9
DK/NA	5.1
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 6C 人前では妻は夫をたてた方がよい

	%
そう思う	43.7
どちらかと言えばそう思う	42.5
どちらかと言えばそう思わない	4.3
そう思わない	4.4
DK/NA	5.1
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 6D 女性は結婚した方が幸せである

	%
そう思う	25.5
どちらかと言えばそう思う	39.1
どちらかと言えばそう思わない	11.8
そう思わない	17.3
DK/NA	6.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 7-1 意見違い解決方法 - 妻

	%
Aに近い	55.0
どちらかといえばAに近い	36.6
どちらかといえばBに近い	4.5
Bに近い	1.3
DK/NA	2.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 7-2 意見違い解決方法 - 夫

	%
Aに近い	40.7
どちらかといえばAに近い	34.3
どちらかといえばBに近い	12.7
Bに近い	5.0
DK/NA	7.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 8A 決定権 - 子どもに関する問題

	%
主として配偶者が決定する	8.3
配偶者とあなたが話し合って決定する	70.9
主としてあなたが決定する	12.1
主として他の人が決定する	0.0
あてはまらない	4.0
DK/NA	4.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 8B 決定権 - 配偶者の小づかい

	%
主として配偶者が決定する	33.9
配偶者とあなたが話し合って決定する	34.7
主としてあなたが決定する	16.5
主として他の人が決定する	0.2
あてはまらない	7.9
DK/NA	6.8
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 8C 決定権 - あなたの家庭外活動

	%
主として配偶者が決定する	4.6
配偶者とあなたが話し合って決定する	38.9
主としてあなたが決定する	45.7
主として他の人が決定する	0.8
あてはまらない	3.0
DK/NA	7.0
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 8D 決定権 - 生活費

	%
主として配偶者が決定する	11.8
配偶者とあなたが話し合って決定する	37.5
主としてあなたが決定する	43.0
主として他の人が決定する	2.1
DK/NA	5.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 8E 決定権 - その他のこと全般

	%
主として配偶者が決定する	13.2
配偶者とあなたが話し合って決定する	64.8
主としてあなたが決定する	11.0
主として他の人が決定する	1.9
DK/NA	9.2
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9A 妻が何を言っても無視する

	%
どんなことがあっても許されない	28.8
場合によっては許される	55.6
許される	7.0
DK/NA	8.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9B 妻の交友関係や電話を細かく監視する

	%
どんなことがあっても許されない	31.4
場合によっては許される	38.2
許される	19.1
DK/NA	11.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9C 妻の意に反して性的な行為を強要する

	%
どんなことがあっても許されない	41.2
場合によっては許される	35.9
許される	9.0
DK/NA	13.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9D 妻に家計費の使いみちを細かく報告させる

	%
どんなことがあっても許されない	17.4
場合によっては許される	51.0
許される	19.1
DK/NA	12.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9E なぐるふりをして、おどす

	%
どんなことがあっても許されない	64.5
場合によっては許される	9.7
許される	10.9
DK/NA	14.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9F 大声でどなる

	%
どんなことがあっても許されない	47.5
場合によっては許される	29.8
許される	8.9
DK/NA	13.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 9G 平手で打つ

	%
どんなことがあっても許されない	67.1
場合によっては許される	7.7
許される	9.9
DK/NA	15.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10A 押したり、つかんだり、つねったり、こづかれた

	%
何度もされたことがある	5.7
一、二度されたことがある	20.6
まったくされことはない	68.1
DK/NA	5.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10B 平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた

	%
何度もされたことがある	6.0
一、二度されたことがある	22.7
まったくされことはない	66.0
DK/NA	5.4
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10C 腕をねじあげられたり、けられたり、
殴られた

	%
何度もされたことがある	3.3
一、二度されたことがある	9.3
まったくされことはない	80.7
DK/NA	6.8
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10D 首を絞められたり、絞めかけられた

	%
何度もされたことがある	0.8
一、二度されたことがある	2.0
まったくされことはない	90.7
DK/NA	6.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10E 髪をつかんで引っ張られたり、
ひきずられた

	%
何度もされたことがある	1.5
一、二度されたことがある	4.1
まったくされことはない	87.8
DK/NA	6.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10F 具合が悪いとき、あるいは妊娠中に
働かされたり、つらくあたられた

	%
何度もされたことがある	2.8
一、二度されたことがある	12.1
まったくされことはない	79.0
DK/NA	6.1
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10G 胸ぐらをつかまれたり、身振り・
物・言葉などで脅された

	%
何度もされたことがある	3.7
一、二度されたことがある	10.7
まったくされことはない	79.4
DK/NA	6.2
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10H 食卓や作った食事をひっくり
返された

	%
何度もされたことがある	2.2
一、二度されたことがある	7.3
まったくされことはない	84.2
DK/NA	6.3
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10I 何を言っても無視され続けた

	%
何どもされたことがある	4.3
一、二度されたことがある	19.2
まったくされことはない	69.9
DK/NA	6.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10J 大切にしているものを故意に壊されたり
捨てられたり、ペットをいじめられた

	%
何度もされたことがある	1.1
一、二度されたことがある	5.9
まったくされことはない	86.4
DK/NA	6.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10K 土下座などで無理やり謝らされた

	%
何度もされたことがある	0.7
一、二度されたことがある	3.2
まったくされことはない	89.6
DK/NA	6.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10L 命令口調でものを言われたり、
怒鳴られた

	%
何度もされたことがある	11.1
一、二度されたことがある	26.6
まったくされことはない	56.1
DK/NA	6.2
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10M 「誰のおかげでおまえは食べられる
んだ」などと恩にきせられた

	%
何度もされたことがある	4.4
一、二度されたことがある	10.5
まったくされことはない	79.1
DK/NA	5.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10N 「おまえはバカだ」、「何も知らない」、
「便所」、「死ぬ」などと口汚く
ののしられた

	%
何度もされたことがある	4.2
一、二度されたことがある	9.9
まったくされことはない	79.4
DK/NA	6.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10O お金の使いみちを細かくチェック
されたり、生活費を渡されなかった

	%
何度もされたことがある	1.7
一、二度されたことがある	7.0
まったくされことはない	85.1
DK/NA	6.2
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10P 実家や友人とのつきあいや外出を
制限されたり、電話や郵便物を
チェックされた

	%
何度もされたことがある	2.4
一、二度されたことがある	8.5
まったくされことはない	82.9
DK/NA	6.2
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10Q 避妊に協力してくれなかったり、
中絶を強要された

	%
何度もされたことがある	0.8
一、二度されたことがある	5.8
まったくされことはない	86.4
DK/NA	6.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10R 嫌がっているのにセックスを強要され
たり、暴力的・屈辱的セックスをされた

	%
何度もされたことがある	3.7
一、二度されたことがある	13.0
まったくされことはない	76.8
DK/NA	6.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10S 「不感症だ」、「下手だ」などと
セックスや性器について非難された

	%
何度もされたことがある	0.8
一、二度されたことがある	5.9
まったくされことはない	86.5
DK/NA	6.8
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10T その他の暴力を受けたり、
危険な目にあわされた

	%
何度もされたことがある	0.8
一、二度されたことがある	3.8
まったくされことはない	86.8
DK/NA	8.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 10U その他の行動を制限されたり、
苦痛な目にあわされた

	%
何度もされたことがある	1.6
一、二度されたことがある	5.2
まったくされことはない	84.4
DK/NA	8.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 11 その他の暴力

	%
お酒による暴力	22.4
夫の浮気	5.1
ギャンブル	3.1
過度に行動を監視される	2.0
お酒による暴力とギャンブル	1.0
DK/NA	66.3
計	100.0

注：%の基数は 98

問 12 もっとも継続するDV

	%
押したり、つかんだり、つねったり、こづかれた	6.8
平手で打たれたり、物を投げつけられたり、たたかれた	8.2
腕をねじあげられたり、けられたり、殴られた	1.0
首を絞められたり、締めかけられた	0.0
髪をつかんで引っ張られたり、ひきずられた	0.4
具合が悪いとき、あるいは妊娠中に働かされたり、つらくあたられた	3.8
胸ぐらをつかまれたり、身振り・物・言葉などで脅された	1.0
食卓や作った食事をひっくり返された	0.6
何を言っても無視され続けた	15.5
大切にしているものを故意に壊されたり捨てられたり、ペットをいじめられた	0.0
土下座などで無理やり謝らされた	0.2
命令口調でものを言われたり、怒鳴られた	36.5
「誰のおかげでおまえは食べられるんだ」などと 恩にきせられた	5.8
「おまえはバカだ」、「何も知らない」、「便所」、「死ぬ」 などと口汚くののしられた	5.8
お金の使いみちを細かくチェックされたり、生活費を 渡されなかった	3.4
実家や友人とのつきあいや外出を制限されたり、電話や 郵便物をチェックされた	2.8
避妊に協力してくれなかったり、中絶を強要された	0.8
嫌がっているのにセックスを強要されたり、暴力的・ 屈辱的セックスをされた	5.8
「不感症だ」、「下手だ」などとセックスや性器について 非難された	1.2
その他の暴力を受けたり、危険な目にあわされた	0.2
その他の行動を制限されたり、苦痛な目にあわされた	0.4
計	100.0

注：%の基数は 502

問 13 DVの継続期間

	%
1 年未満	19.3
1 年以上 3 年未満	7.3
3 年以上 5 年未満	4.5
5 年以上 10 年未満	6.2
10 年以上 20 年未満	9.5
20 年以上	12.0
その他	28.7
DK/NA	12.5
計	100.0

注：%の基数は 600

問 14 DVの相談経験

	%
相談した	24.2
相談したかったが、相談しなかった	11.3
相談しようと思わなかった	50.0
DK/NA	14.5
計	100.0

注：%の基数は 600

問 15 相談した相手

	%
自分の親・きょうだい・子ども	68.1
自分の親せき	8.5
夫の親族	17.7
友人・知人	36.9
近所の人	2.1
町内会や婦人会の人	0.0
カウンセラーや自助グループ	0.7
女性センター、福祉事務所、保健所などの相談窓口、婦人相談所	1.4
その他	4.3

注：複数回答で、%の基数は 141

問 16 相談しない理由

	%
相談するほどのことでもないと思ったから	68.5
自分にも悪いところがあると思ったから	40.2
自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから	28.5
世間体が悪いと思ったから	4.7
恥ずかしかったから	3.1
このことが知れると、周囲の人に心配や迷惑をかけると思ったから	9.1
だれに（どこに）相談すればよいのかわからなかったから	3.1
その他	2.3

注：複数回答で、%の基数は 383

問 17 暴力への対応

	%
何もしなかった	27.2
言い返した、抵抗した、反撃した	47.7
その場から逃げようとした、あるいは逃げた	16.8
相手にあわせたり、相手を怒らせないように努力した	19.4
口をきかなくなった、食事を別にした	16.6
別れることを考えた、離婚や別居を考えた	33.8
その他	1.5

注：複数回答で、%の基数は 541

問 18 離別にもなう不安や悩み

	%
収入がなく、生活していくメドが立たないと思った	36.1
別れても行くところがないと思った	21.9
子どものことが心配だった	70.5
別居や離婚を言い出したら、夫に何をされるかわからないと思った	9.8
私が夫を支えていなければと思った	6.6
夫が変わってくれるのではないかと思った	20.8
世間体を考えた	30.6
別れることに反対している人がいた	11.5
特に不安や悩みはなかった	9.8
その他	4.4

注：複数回答で、%の基数は 183

問 19 配偶者の暴力の経験・見聞

	%
「見た」と聞いたことがある	8.2
「経験した」と聞いたことがある	9.3
聞いたことがない	79.4
DK/NA	3.1
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 20 回答者の暴力の見聞

	%
ある	29.2
ない	64.2
DK/NA	6.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 21 暴力の被害者

	%
母親	27.3
姉妹	13.5
姑	11.1
友人・知人	42.4
近所の女性	27.3
その他	6.2

注：複数回答で、%の基数は 370

問 22 暴力への対応の見方

	%
Aに近い	37.3
どちらかといえばAに近い	23.3
どちらかといえばBに近い	18.4
Bに近い	11.3
DK/NA	9.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 23 DVの認知度

	%
知らない	59.7
「ドメスティック・バイオレンス(DV)」という言葉だけは聞いたことがある	17.4
「DV」の言葉の意味は知っているが、DV法があることは知らない	9.0
「DV」の言葉の意味も知っており、DV法があることも知っている	8.5
「DV」の言葉の意味も知っており、DV法の内容までも知っている	0.4
DK/NA	5.1
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 24A 自分は少なくとも人なみには
価値のある人間だ

	%
あてはまらない	4.8
ややあてはまらない	5.5
ややあてはまる	44.7
あてはまる	39.4
DK/NA	5.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 24B 何かにつけて自分は役に立たない
人間だ

	%
あてはまらない	44.1
ややあてはまらない	19.3
ややあてはまる	10.8
あてはまる	2.1
DK/NA	23.7
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 25A あなたと夫との関係

	%
満足している	37.1
どちらかといえば満足している	43.0
どちらかといえば不満である	11.4
不満である	4.6
DK/NA	3.8
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 25B あなたと子どもとの関係

	%
満足している	50.5
どちらかといえば満足している	35.4
どちらかといえば不満である	4.0
不満である	0.9
あてはまらない	2.7
DK/NA	6.0
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 25C 家庭内の他の人との関係

	%
満足している	24.5
どちらかといえば満足している	42.3
どちらかといえば不満である	11.4
不満である	4.7
あてはまらない	8.3
DK/NA	8.9
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 25D 生活全般

	%
満足している	29.3
どちらかといえば満足している	48.6
どちらかといえば不満である	11.3
不満である	3.3
DK/NA	7.5
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 26 回答者の職業

	%
農林漁業	13.8
商工・サービス業	9.5
自由業	1.5
経営・管理職	1.6
専門・技術職	5.7
事務職	7.6
労務・技能職	12.0
販売・サービス職	9.3
学生	0.1
その他の無職	31.4
その他	0.1
DK/NA	7.6
計	100.0
(%の基数)	(1284)

問 27 「勤め人」として働いている
回答者の雇用形態

	%
常勤	63.1
非常勤（パートタイム、アルバイトなど）	36.6
DK/NA	0.3
計	100.0

注：%の基数は 464

問 28 自由に使えるお金

	%		%
なし	12.1	12 万円	0.3
1 万円	12.2	13 万円	0.1
2 万円	16.2	14 万円	0.1
3 万円	15.7	15 万円	1.6
4 万円	1.2	17 万円	0.2
5 万円	13.2	18 万円	0.2
6 万円	1.7	20 万円	2.8
7 万円	0.7	21 万円以上 100 万円以下	1.7
8 万円	0.9	DK/NA	10.5
11 万円	8.5		
計			100.0
(%の基数)			(1284)

問 29 回答者の学歴

	%
小学校（旧制尋常小学校なども含む）	5.0
新制中学（旧制高等小学校なども含む）	21.8
新制高校（旧制中学校なども含む）	44.2
専門学校（新制高校卒業後入学したもの）	13.9
短大・高専（旧制高等学校なども含む）	8.2
大学（大学院も含む）	2.5
その他	0.1
DK/NA	4.4
計	100.0
（%の基数）	（1284）

問 30 配偶者の職業

	%
農林漁業	17.8
商工・サービス業	10.8
自由業	3.1
経営・管理職	9.1
専門・技術職	6.5
事務職	5.7
労務・技能職	19.8
販売・サービス職	4.4
学生	0.1
その他の無職	14.3
その他	0.1
DK/NA	8.4
計	100.0
（%の基数）	（1284）

問 31 「勤め人」として働いている
配偶者の雇用形態

	%
常勤	92.8
非常勤（パートタイム、アルバイトなど）	5.0
DK/NA	2.2
計	100.0

注：%の基数は 584

問 32 配偶者の学歴

	%
小学校（旧制尋常小学校なども含む）	5.1
新制中学（旧制高等小学校なども含む）	22.6
新制高校（旧制中学校なども含む）	46.3
専門学校（新制高校卒業後入学したもの）	6.6
短大・高専（旧制高等学校なども含む）	4.0
大学（大学院も含む）	10.7
DK/NA	4.5
計	100.0
（%の基数）	（1284）

問 33 1世帯あたりの人数（回答者を含む）

	%		%
1人	0.1	8人	3.3
2人	18.1	9人	1.6
3人	13.8	10人	0.1
4人	18.0	11人	0.2
5人	15.4	13人	0.2
6人	16.7	16人	0.1
7人	10.0	DK/NA	2.6
計			100.0
(%の基数)			(1284)

問 34 配偶者の年収

	%		%
収入なし	4.6	700万円以上 1,000万円未満	9.4
100万円未満	4.1	1,000万円以上 1,500万円未満	2.8
100万円以上 200万円未満	10.7	1,500万円以上	1.4
200万円以上 400万円未満	33.3	DK/NA	7.4
400万円以上 700万円未満	26.3		
計			100.0
(%の基数)			(1284)

2002年3月発行

(財)女性のためのアジア平和国民基金(アジア女性基金)

*無断転載を禁じます。

この報告書は、アジア女性基金が、お茶の水女子大学文教育学部・坂本佳鶴恵
助教授に委託した調査研究の結果です。

研究代表者	：坂本佳鶴恵	(お茶の水女子大学文教育学部助教授)
共同研究者	：原 純輔	(東北大学文学部教授)
	三隅多恵子	(東北大学大学院博士後期課程)
	西倉実季	(お茶の水女子大学退学院博士後期課程)
	小島 香	(お茶の水女子大学退学院博士前期課程)
研究協力	：飯塚和子	(お茶の水女子大学退学院博士後期課程)